

第4節 中道東山西山遺跡出土炭化材等放射性炭素年代測定

加速器分析研究所

表示したBP年代は1950年から何年前かの年数で、¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また付記した誤差はβ線の計測値の標準偏差δにもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2δ以下のときは、3δに相当する年代を下限の年代値(記号>)として表示している。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が2δ以下の時には、Modernと表示している。

表示した同位体比は標準値からのずれをパーミルで表した値である。δ¹⁴Cの値は、放射線の測定で求めた試料炭素中の¹⁴C濃度Aと現在の炭素の標準の濃度A(std)を用いて、

$$\delta^{14}\text{C} = [(A - A(\text{std}) / A(\text{std})) \times 1000$$

によって算出された値である。δ¹³Cの値は、試料炭素の¹³C/¹²C原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値である。

Δ¹⁴Cは試料炭素がδ¹³C = -25.0パーミルであったときの¹⁴C濃度を計算した値である。この濃度を用いて、(貝殻など海洋起源の試料を除き)表記のBP年代値が算出されている。したがって、表記の年代値は同位体効果による測定誤差を補正した年代値となっている。

表78 放射性炭素年代測定結果

Code No.	試料	BP年代と炭素の同位体比	Code No.	試料	BP年代と炭素の同位体比
I AA-543	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.1 (SK3)	1430±60 δ ¹⁴ C = -164.9±6.4 δ ¹³ C = -25.5 Δ ¹⁴ C = -164.1±6.4	I AA-551	泥炭・炭化物 from 中道東山西山遺跡 No.9 (SB6)	1980±130 δ ¹⁴ C = -217.7±12.4 δ ¹³ C = -24.2 Δ ¹⁴ C = -218.9±12.4
I AA-544	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.2 (SK3)	1370±70 δ ¹⁴ C = -156.7±7.6 δ ¹³ C = -24.7 Δ ¹⁴ C = -157.2±7.6	I AA-552	泥炭・炭化物 from 中道東山西山遺跡 No.10 (SB7)	1760±120 δ ¹⁴ C = -193.8±12.0 δ ¹³ C = -22.6 Δ ¹⁴ C = -197.7±12.0
I AA-545	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.3 (SK6)	1600±90 δ ¹⁴ C = -184.2±9.5 δ ¹³ C = -26.7 Δ ¹⁴ C = -181.4±9.5			
I AA-546	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.4 (SK43)	1730±100 δ ¹⁴ C = -197.2±10.5 δ ¹³ C = -26.8 Δ ¹⁴ C = -194.3±10.5			
I AA-547	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.5 (SK40)	1580±70 δ ¹⁴ C = -183.9±7.0 δ ¹³ C = -27.9 Δ ¹⁴ C = -179.1±7.0			
I AA-548	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.6 (SK63)	1660±90 δ ¹⁴ C = -193.4±9.0 δ ¹³ C = -28.7 Δ ¹⁴ C = -187.5±9.0			
I AA-549	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.7 (SK22)	1650±90 δ ¹⁴ C = -191.0±9.3 δ ¹³ C = -27.7 Δ ¹⁴ C = -186.6±9.3			
I AA-550	木炭 from 中道東山西山遺跡 No.8 (SK58)	1490±80 δ ¹⁴ C = -171.3±8.3 δ ¹³ C = -26.2 Δ ¹⁴ C = -169.4±8.3			

表79 暦年代補正用年代値

Code No.	試料名	Libby Age
I AA-543	No.1 (SK3)	1439±62
I AA-544	No.2 (SK3)	1373±72
I AA-545	No.3 (SK6)	1608±93
I AA-546	No.4 (SK43)	1735±104
I AA-547	No.5 (SK40)	1585±69
I AA-548	No.6 (SK63)	1667±89
I AA-549	No.7 (SK22)	1659±91
I AA-550	No.8 (SK58)	1490±80
I AA-551	No.9 (SB6)	1984±128
I AA-552	No.10 (SB7)	1769±120

第5節 中道東山西山遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析の目的

中道東山西山遺跡は、弥生時代後期と平安時代前期（9世紀中～後半）かけての複合集落遺跡である。

この胎土分析では、平安時代の遺構および包含層から出土した土器を理化学的な手法（蛍光X線分析法、実体顕微鏡による胎土分析）を用いて分析し、以下の点について調べた。

- (1) この時期の遺跡内出土土器（土師器・須恵器）のあいだで胎土に差異がみられるか。
- (2) 土師器では米子市古市宮ノ谷遺跡出土の10世紀代の坏類（土師器焼成遺構）と比較検討した。
- (3) 須恵器では器種により胎土が異なるかどうか検討した。

2. 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、表80に示した土師器10点、須恵器10点の合計20点の坏・壺・甕などである。

3. 蛍光X線分析法による分析結果

第208図K - Ca、第209図Sr - Rbの散布図では遺跡内出土の土師器、須恵器で胎土に違いがあるか検討した。その結果、土師器の坏類、須恵器の壺・甕類がそれぞれまとまり、焼成の違いで胎土が異なっていることが推定された。また須恵器の坏3点は、KおよびRb量の違いでそれぞれ単独で分布し個々に胎土が異なっていた。特に16の坏は他のものと明らかに異なっていた。

第210図K - Ca、第211図Sr - Rbの散布図では、時期は異なるが、各地域との胎土比較を目的として米子市古市宮ノ谷遺跡出土の10世紀代の坏類（土師器焼成遺構）と本遺跡の土師器を比較した。すると、古市宮ノ谷遺跡の土師器とは胎土が異なり識別できた。

第212図K - Ca、第213図Sr - Rbの散布図では、須恵器の産地推定を試みた。ただ、今回比較した窯跡は、宍道湖・中海周辺（大井窯跡群山津支群、平田市木舟窯跡群、小松窯跡・渋山池窯跡・古曾志窯跡・門生黒谷窯跡）の9世紀～10世紀代の試料である。この結果18（壺）、20（高台坏）以外はほぼ宍道湖・中海周辺の窯跡分布域に分布した。ただ、16（坏）と17（高台坏）は第212図で分布域からはずれている。

4. 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。また、岩石、鉱物の含有量は相対的な観察で多量・普通・少量・希にの4段階で分類したため定量性には欠けるが一応の目安とした。

観察した土器は土師器で、胎土中には2mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石、黒雲母、火山ガラスが含まれていた。含有量は石英が多量に含まれ、長石は少量である。そして、角閃石は土器により含有量が異なり、試料番号7の高台付皿には多量に含まれていた。また、黒雲母・火山ガラスは希に～少量とばらつきがみられた。

5. まとめ

中道東山西山遺跡出土土器の胎土分析（蛍光X線分析、実体顕微鏡観察）を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

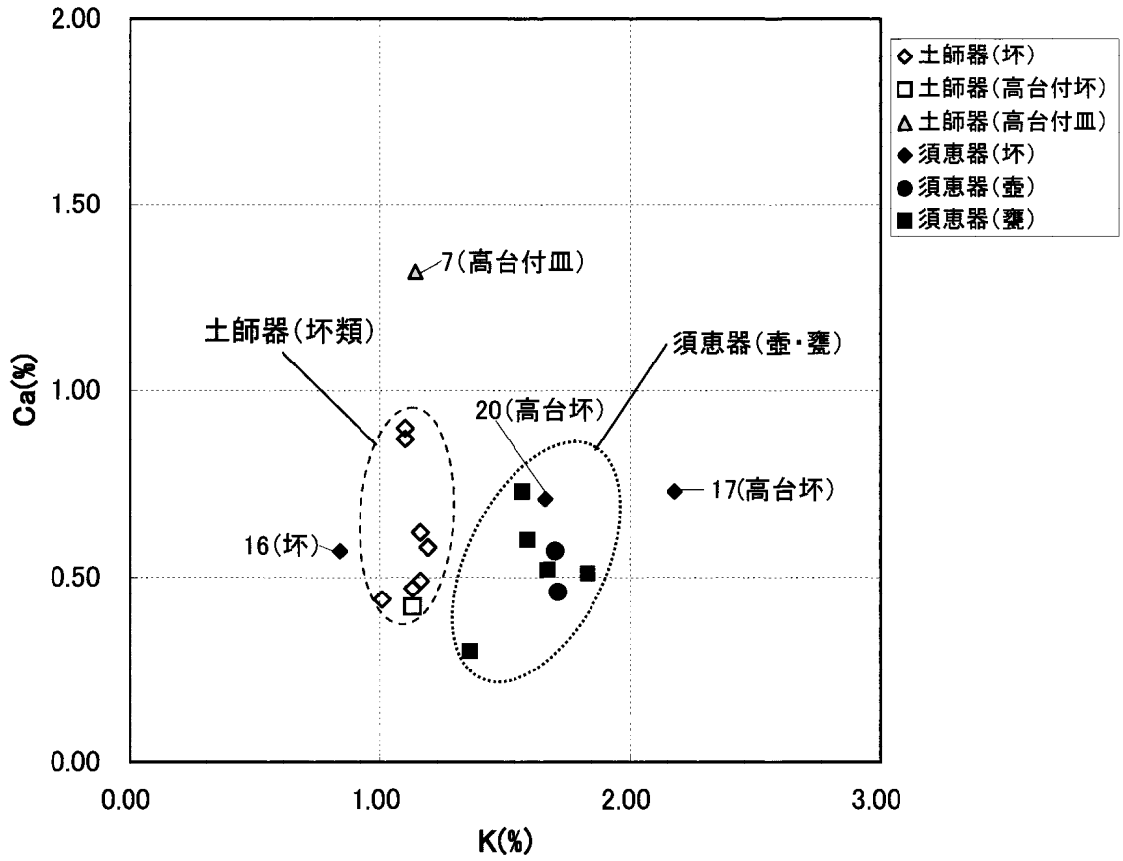
- (1) 遺跡内での器種、質（焼成）により胎土に差があるかどうかでは、当然のことながら土師器と須恵器のあいだで胎土に差がみられた。また、土師器のなかでも高台付皿は他の坏と胎土がやや異なっていた。そして、この高台付皿には角閃石が他のものより多く含まれており胎土差はこれが起因していると推定される。
- (2) 遺跡内での須恵器の胎土比較では、甕・壺はほぼ一つにまとまるが、坏に関してはそれぞれ胎土が異なると推定された。また、生産地推定では、現在蓄積しているこの時期の生産地試料が出雲地域（宍道湖・中海周辺の9世紀～10世紀代の試料）に限られているがこの地域の窯跡との比較を行ったところ、ほとんどの試料がこの地域の分布域に分布した。しかし18と20は胎土が異なっていたし、16と17もK - Ca 散布図で異なっていた。非常に限られた生産地試料との比較であるため産地を推定するにはやや無理があるかもしれない。鳥取県内の産地試料も蓄積し改めて検討する必要がある。

以上のように、須恵器の産地推定では、窯跡試料が限られているため十分に検討できなかった。今後の課題としたい。

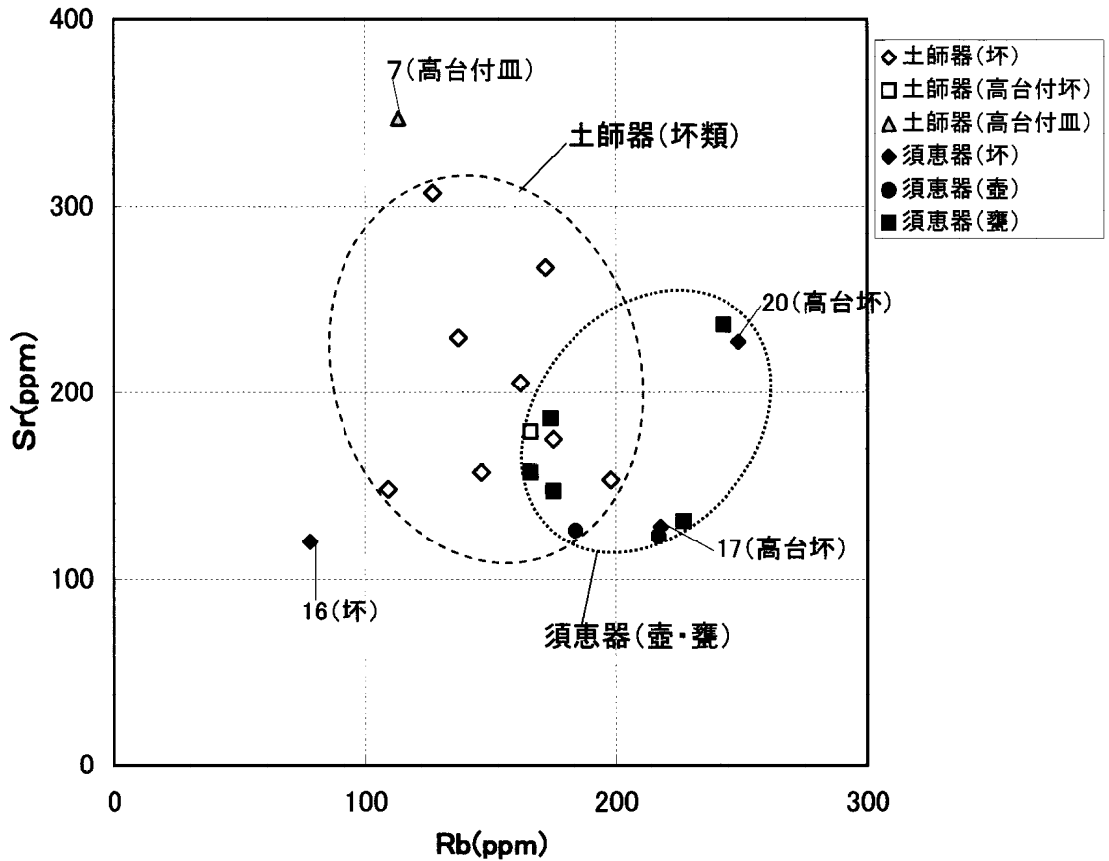
この分析の機会を与えていただいた、(財)鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。また、窯跡の分析試料では島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、松江市教育委員会、平田市教育委員会にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

表80 中道東山西山遺跡出土土器の胎土分析値一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm.

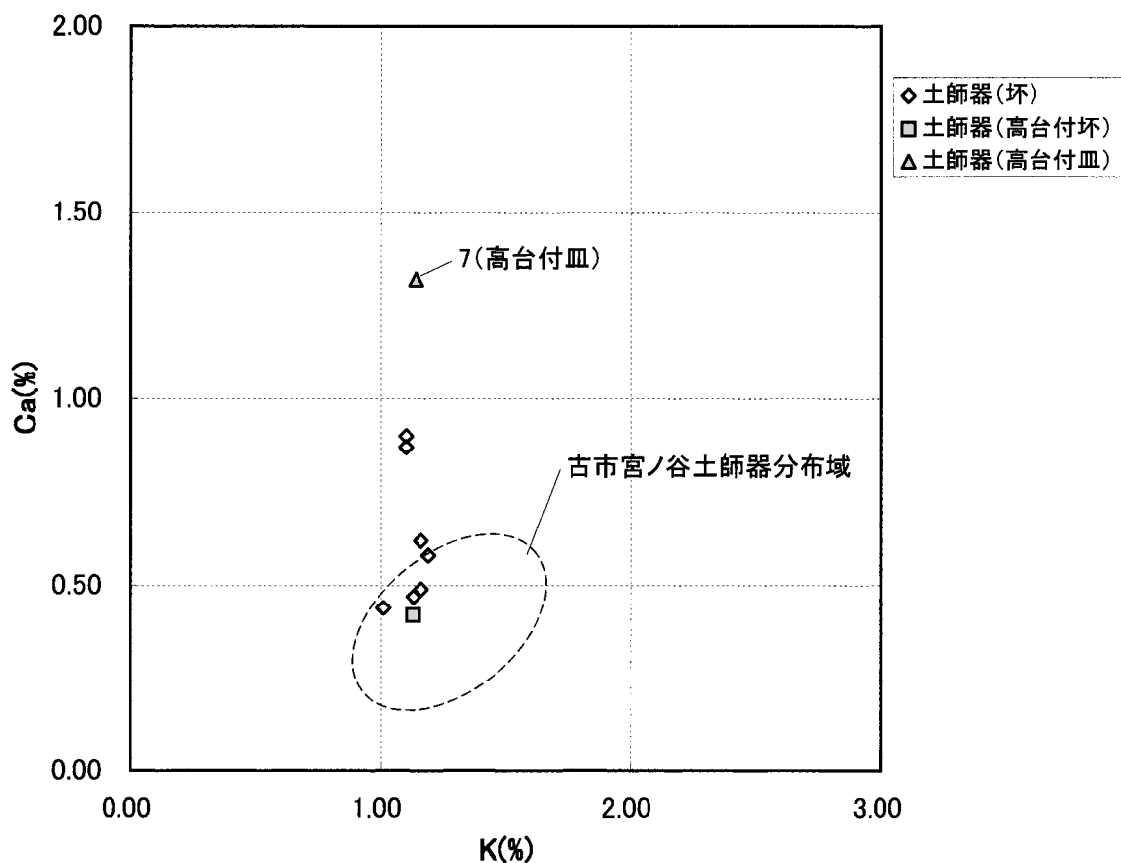
試料番号	報告番号	種類	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	84	土師器	坏	61.90	1.26	26.68	4.72	0.04	2.15	0.44	1.53	1.01	0.12	146	157	443
2	85	土師器	坏	62.40	1.23	26.09	4.33	0.04	1.96	0.47	2.09	1.13	0.06	175	175	374
3	146	土師器	坏	60.87	1.27	26.70	4.72	0.05	2.00	0.44	2.74	1.01	0.07	109	148	399
4	86	土師器	坏	62.93	1.12	24.88	4.42	0.05	1.99	0.62	2.57	1.16	0.09	137	229	304
5	87	土師器	坏	63.86	1.31	24.11	4.29	0.04	2.06	0.49	2.44	1.16	0.06	198	153	402
6	163	土師器	高台付坏	62.29	1.24	25.98	4.17	0.03	2.03	0.42	2.50	1.13	0.06	166	179	359
7	141	土師器	高台付皿	58.69	1.14	27.44	5.47	0.06	2.09	1.32	2.36	1.14	0.07	113	347	337
8	185	土師器	坏	63.12	1.02	24.00	4.75	0.05	2.20	0.90	2.59	1.10	0.07	127	307	315
9	142	土師器	坏	60.88	1.09	25.57	5.24	0.07	2.09	0.87	2.85	1.10	0.09	172	267	326
10	187	土師器	坏	63.71	1.16	24.26	4.39	0.04	2.08	0.58	2.35	1.19	0.10	162	205	306
11	152	須恵器	甕	69.38	1.31	17.31	6.09	0.08	1.78	0.60	1.54	1.59	0.15	174	186	458
12	198	須恵器	甕	67.96	1.05	18.62	5.37	0.08	1.79	0.51	2.42	1.83	0.17	227	131	340
13	93	須恵器	甕	68.23	0.87	18.26	7.14	0.07	1.78	0.30	1.64	1.36	0.16	175	147	350
14	196	須恵器	壺	68.43	1.06	18.96	4.86	0.07	1.98	0.46	2.15	1.71	0.14	184	126	335
15	195	須恵器	壺	67.95	0.96	18.59	5.47	0.08	1.96	0.57	2.28	1.70	0.19	217	123	309
16	192	須恵器	坏	61.41	1.34	19.53	7.81	0.14	2.82	0.57	5.29	0.84	0.08	78	120	277
17	194	須恵器	坏	65.22	1.05	22.11	4.26	0.05	1.86	0.73	2.19	2.18	0.10	218	128	446
18	199	須恵器	甕	66.58	1.02	20.22	4.87	0.05	2.10	0.73	2.46	1.57	0.19	243	236	344
19	197	須恵器	甕	69.88	1.15	17.45	4.90	0.06	1.70	0.52	2.30	1.67	0.11	166	157	461
20	193	須恵器	坏	66.56	0.95	19.22	6.05	0.07	2.21	0.71	2.22	1.66	0.14	249	227	349



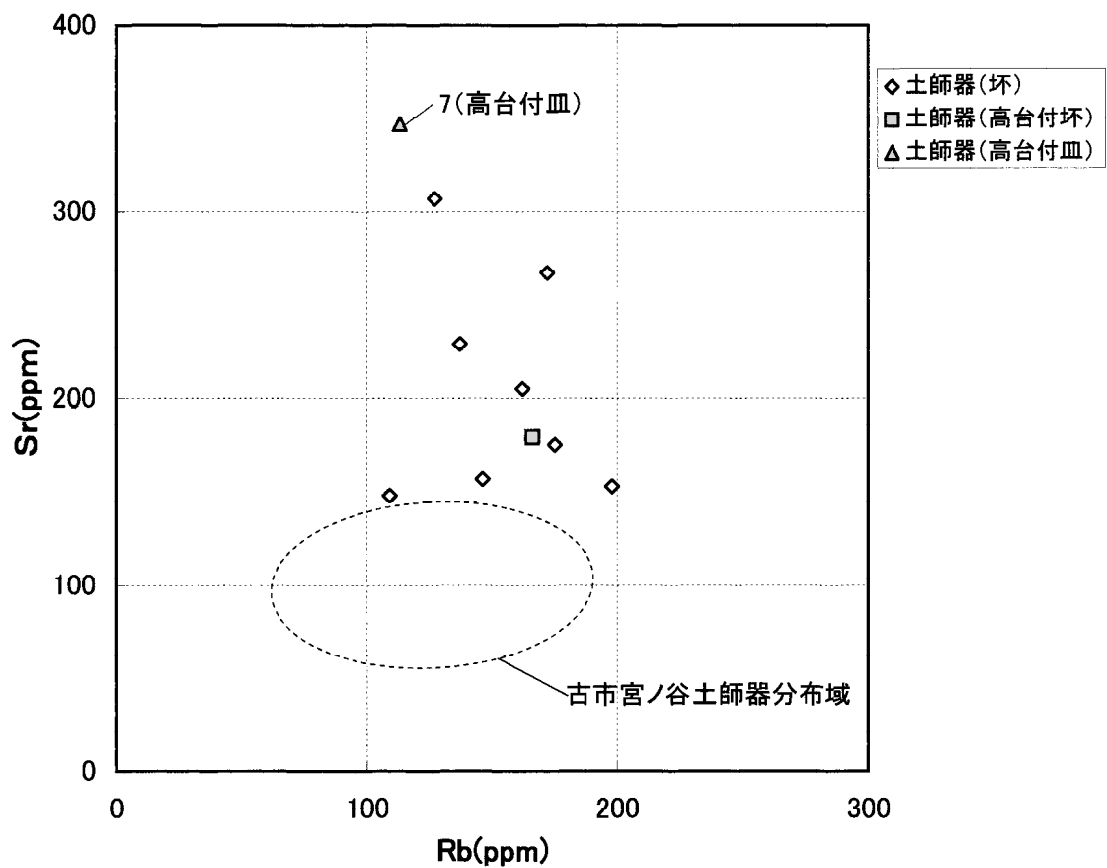
第208図 遺跡内出土土器の胎土比較 (K - Ca 散布図)



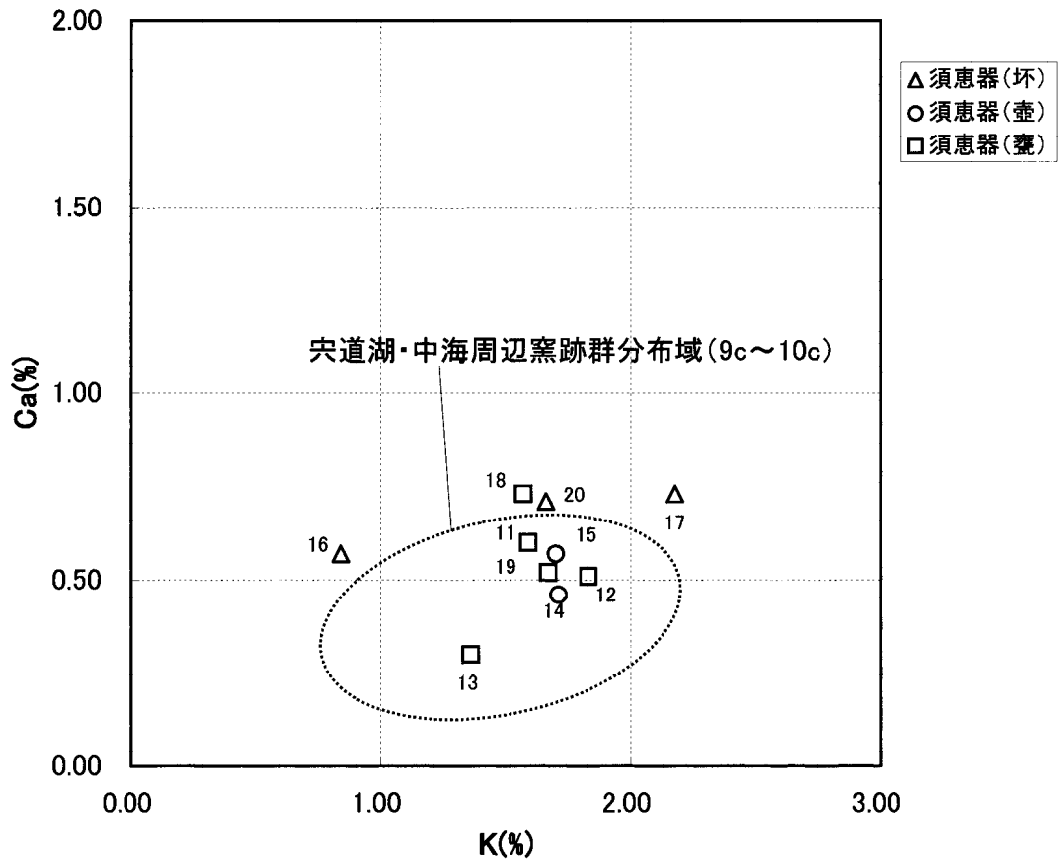
第209図 遺跡内出土土器の胎土比較 (Rb - Sr 散布図)



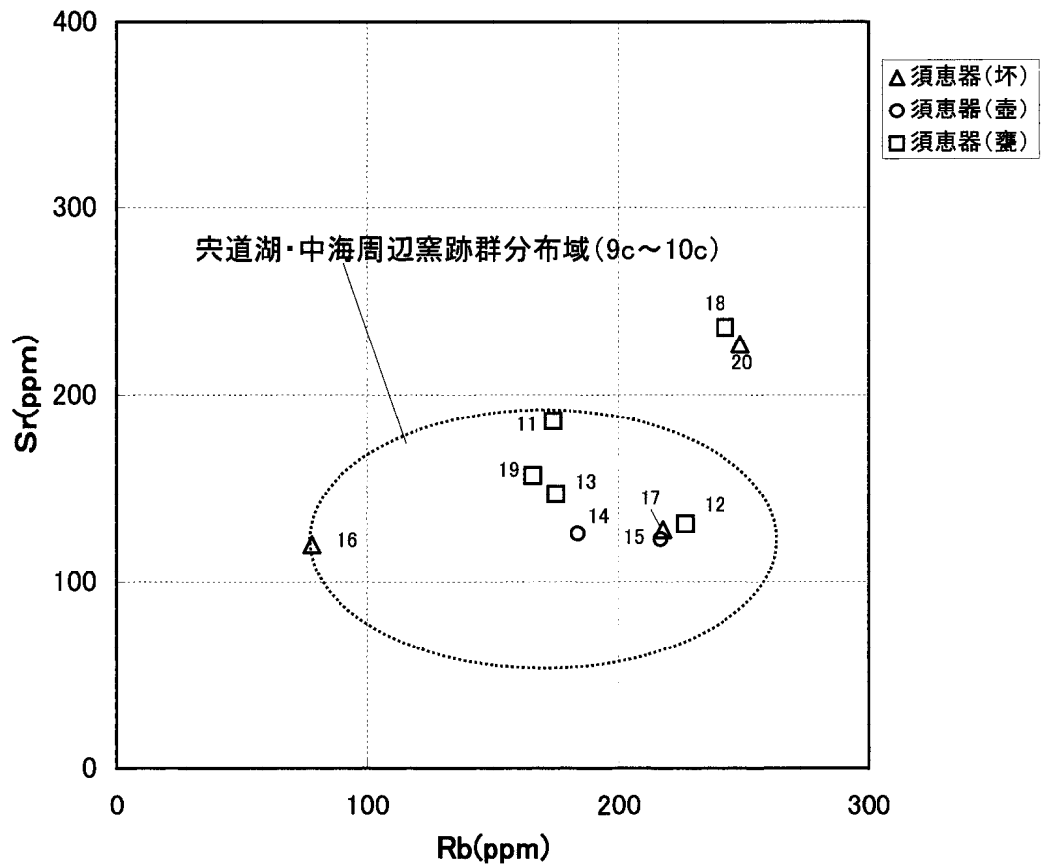
第210図 古市宮ノ谷山出土土師器との胎土比較 (K - Ca 散布図)



第211図 古市宮ノ谷山出土土師器との胎土比較 (Rb - Sr 散布図)



第212図 生産地（窯跡）との胎土比較（K - Ca 散布図）



第213図 生産地（窯跡）との胎土比較（Rb - Sr 散布図）

第6章 考古学的考察

第1節 中道東山西山遺跡における鉄生産の様相

はじめに

中道東山西山遺跡では、3棟の製鉄・鍛冶関連遺構と多量の関連遺物が出土している。とくに古代の鍛冶炉を伴う遺跡は、県内において3例目となり、これらの情報は山陰地方の古代鉄生産の実態を解明する上で大きな手がかりとなる。本節では、自然科学分析の成果を踏まえ中道東山西山遺跡における鉄生産の様相を検討し、まとめとしたい。

1. 操業年代

鍛冶炉を有するS B 6・7から出土した土器は、伯耆国庁編年第2段階に比定される(巽1979)。また、両鍛冶工房が位置する東山南半部～谷部において堆積する第Ⅱ・Ⅲ層から出土する土器が弥生土器を除いてほぼ同段階に比定されるものに収まることから、鍛冶操業年代は9世紀としたい⁽¹⁾。ただし、S B 6・7は主軸に若干のズレがみられ、桁行数も異なることから、同時併存したのではなく、9世紀代の2時期にわたって操業していたものと考えられる。

2. 鍛冶遺構の構造と操業空間

遺構配置 S B 6は桁行3間(4.6m)、梁行2間(3.2m)、面積約14.7㎡、S B 7は桁行2間(4.5m)、梁行2間(3.2m)、面積約14.4㎡の掘立柱建物であり、桁行こそ異なるが、面積や鍛冶炉の配置はほぼ一致している(安間2000)⁽²⁾。しかしながら、鍛冶炉脇に位置する土坑は、配置が異なっている。S B 6-S K 51は、鍛冶炉の西側に位置し、長軸1.15m、短軸1.0m、深さ0.47mの隅丸長方形のやや大型の土坑である。これは、新炉構築の際に合わせて土坑を拡張したものと考えられる。土坑南壁寄りと北東壁寄りには、粒状滓・鍛造剥片・鉄床石の破片など微細遺物が密に回収されていることから、この周辺が鍛打作業の中心だったことが窺える。

一方、S B 7では鍛冶炉の北隣に長軸0.76m、短軸0.74m、深さ0.22mの不整五角形のS K 52が位置している。規模は小さいが、埋土中からは多量の鍛冶関連遺物が出土していることから、この土坑周辺が鍛打作業の場であった可能性が高い。鍛冶炉に隣接するこれらの土坑は関東～東北南部における9世紀代の鍛冶遺構でも多く認められ⁽³⁾、鍛冶工人の作業用施設や鉄床設置場所として想定されている⁽⁴⁾(小林1988)。また、数量は少ないが2点の砥石が鍛冶工房周辺で出土していることから、S B 6・7は仕立て場も兼ねていたものと推測される。

排滓場 鍛冶遺構から排出された滓類や鉄器の失敗品、使用不能となった鍛冶具などは谷部を中心に廃棄された。谷部には土坑やピットも多く存在したが、鉄関連遺物が多量に廃棄された特定の遺構は認められないことから、谷部全域が排滓場としての空間であったと考えられる。

3. 操業内容と規模(表81)

操業内容 中道東山西山遺跡から出土した鉄関連遺物の総重量は約15kgである。その内訳は、鉄滓・鉄製品が12772.5g、粒状滓・鍛造剥片が2502.8gである。これとは別に、石錘・鉄床石などの鍛冶

具が16252.8g出土している。鉄製品は、袋状鉄斧・刀子など5点（合計100.4g）であり、日常雑器が主体である。以上の鉄関連遺物から、14点を金属学的分析資料として抽出したところ、流動滓1、鉄塊系遺物1、製錬系含鉄鉄滓5、精錬鍛冶滓1、含鉄鉄滓1、精錬鍛冶工程で派生した粒状滓2、鍛錬鍛冶工程後半段階に伴う鍛造剥片4であることが明らかとなった。これらを通してみると、微細遺物についてはSB7に偏ってしまっているが、製錬遺跡から鉄塊が鍛冶原料として搬入され、SB6・7の鍛冶炉によって精錬・鍛錬鍛冶作業が一貫してなされていたことを示している。とくに含鉄鉄滓の多くが、鍛冶原料となり得る品位ではなく、製錬系鉄塊に固着していた滓を鍛冶炉で除去する前に、打撃で除滓された可能性が指摘されており（第5章第1節）、原料の形態や流通を考える上で興味深い。製錬系の含鉄鉄滓が比較的多く出土しているSS3のように、一括して遺棄する行為がなされていることから、製錬遺跡が近傍もしくは調査区外に存在する可能性もある。

操業規模 SB6・7から出土した粒状滓・鍛造剥片の総重量はそれぞれ1266.6g、1236.2gとほぼ等しく、同規模の操業であったことを示している。遺跡全体の鉄関連遺物の構成比率でみると、含鉄鉄滓と鉄塊系遺物の重量比は合計5.15%であり、同時期に比定される日南町霞牛ノ尾遺跡A地区の12.23%に比べ低い値である⁽⁵⁾。また、鉄素材と成り得る含鉄鉄滓の重量比率が58.3%の名和衣装谷遺跡、32%の同乙ヶ谷遺跡と比べてみても歴然としている（湯川2003、中森2003）。次に、鉄滓の比率であるが、鍛冶工程によってどれだけの滓が排出されるのか、直接の比較対象にはならないが古墳時代の鍛冶再現実験記録⁽⁶⁾を参考にしてみると、940gの鉄塊から刀子2本（85.3g）を作り出すのに、分離生成物を含む鉄滓量が928.5g排出されている（真鍋ほか2002）。あくまでも目安であるが、本遺跡の鉄滓類の総重量12434.9gをこの数値で割ると、約13回の同規模の操業が可能となる程度である。つまり、素材の質・量や排出される滓の量から見ても他遺跡に供給できるほどの排出量ではなく、集落を賄う程度の村方鍛冶であったと考えられる。

4. 鳥取県における古代製鉄・鍛冶関連遺跡（第214図、表82）

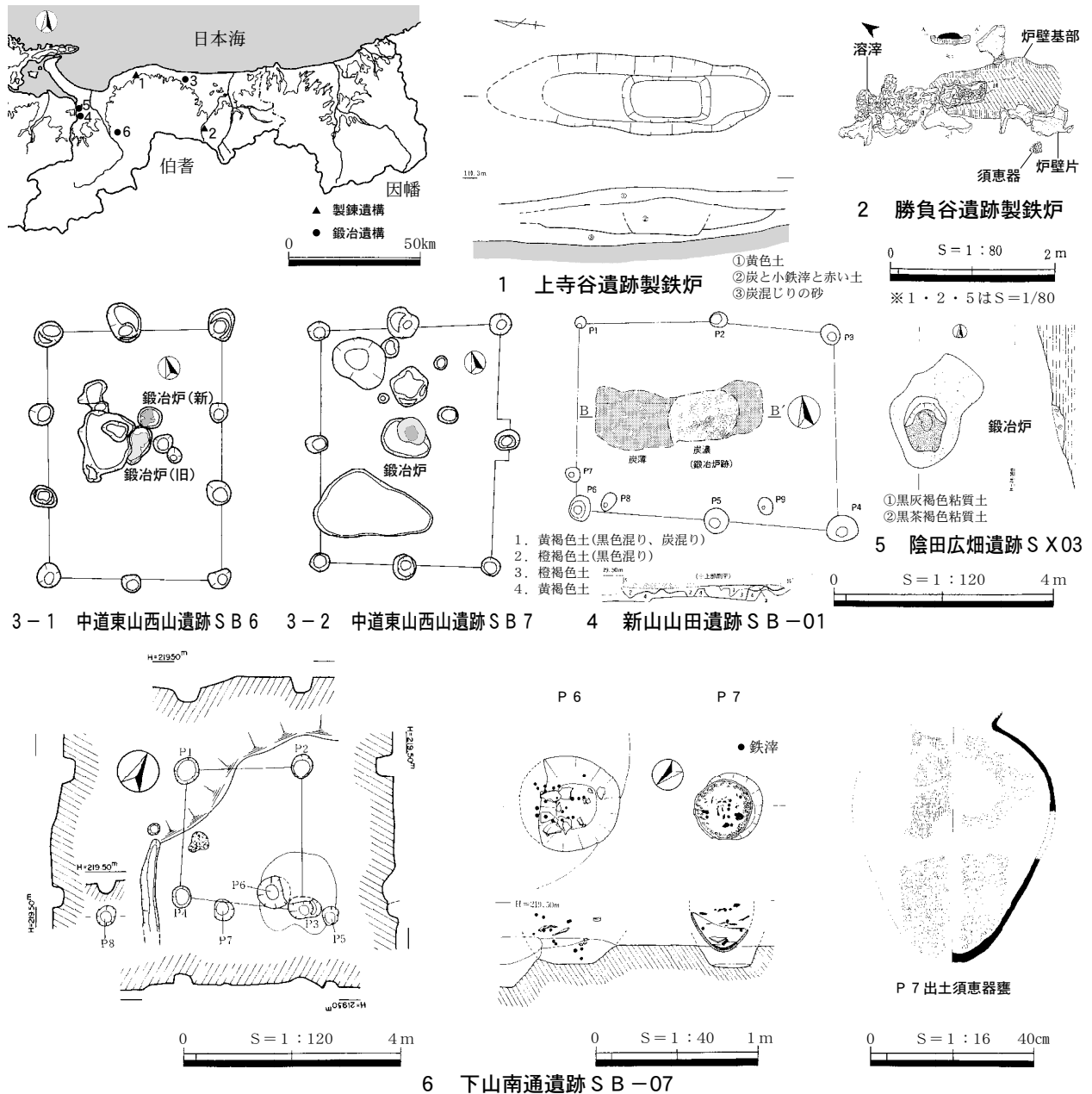
県内における製鉄・鍛冶関連遺物が出土する遺跡は著しく増加しており、古代だけでも約50遺跡に及んでいる（角田1999・2004、松之舎2004）。このなかで、明確な製鉄炉・鍛冶炉を伴う遺跡は、本遺跡を含めてわずか5遺跡であり、分布域は県中～西部に偏っている。8～9世紀代の製錬遺跡として、倉吉市（旧関金町）勝負谷遺跡と名和町上寺谷遺跡が挙げられる。前者は、長さ0.90m、幅0.50m、深さ0.50mの舟形の、後者は長さ0.65m、幅0.25mの同じく舟形の製鉄炉が検出されている（中森2003）。とくに勝負谷遺跡は、炉脇に9世紀代の須恵器甕が出土しており、中道東山西山遺跡の操業時期に近いようである。残念ながら、いずれも炉構造や生成された鉄塊、その他の鉄関連遺物の詳細な情報は不明であり、比較検討はできない。

一方、集落内の鍛冶炉を有する遺跡として、米子市新山山田遺跡（杉谷ほか1994）と同陰田広畑遺跡（濱田ほか1998）がある。新山山田遺跡は、桁行2間（4.8m）、梁行2間（3.6m）、面積約17.28㎡の掘立柱建物跡の中心に鍛冶炉が築かれている。鍛冶炉の規模は、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.35mの楕円形を呈した大型の鍛冶炉といえよう。上部構造は削平され詳細は不明であるが、炉中心は炭混じりの黄褐色土があり、周縁・下部は被熱により酸化した橙褐色土が堆積している。陰田広畑遺跡SX03は単独の鍛冶炉として報告されているが、本来は密集する掘立柱建物のいずれかに帰属するものと思われる。鍛冶炉の規模は、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.15mの不整形を呈して

表81 中道東山西山遺跡主要要素一覧表

遺物名	工程	製 鍊			精 鍊		鍛 鍊		
		低	中	高	前 半	後 半	前 半	後 半	
		TiO ₂							
分析資料		滓	NMH-6 (9.32)		NMH-9 (0.13)				
		含鉄鉄滓	NMH-3 (7.98) NMH-5 (7.15) NMH-8 (7.07)	NMH-4 (13.2) NMH-7			NMH-10 (0.37)		
		鉄塊系遺物		NMH-11					
		粒状滓			NMH-1				
		鍛造剥片						NMH-2	
		分析資料内訳	14点：粒状滓2 (14.3%)、鍛造剥片4 (28.6%)、含鉄鉄滓4 (28.6%)、流動滓1 (7.1%)、 腕形鍛冶滓2 (14.3%)、鉄塊系遺物1 (7.1%)						
遺物情報		遺物全体構成比 (総重量比)	総重量12775.2g：流動滓1 (0.27%)、鉄塊系遺物37.8g (0.30%) 含鉄鉄滓618.9 (4.85%) 腕形鍛冶滓10781.7g (84.41%)、鍛冶滓953.1g (7.46%)、再結合滓46.6g (0.36%) 鉄製品100.4g (0.79%)、炉壁123.5g (0.97%)、炉壁溶解物70.5g (0.55%)、羽口溶解物5.4g (0.04%)						
		(個体数比)	総個体数374：流動滓1 (0.27%)、鉄塊系遺物2 (0.53%)、含鉄鉄滓6 (1.60%)、腕形鍛冶滓133 (35.56%) 鍛冶滓187 (50.00%)、再結合滓22 (5.88%)、鉄製品5 (1.34%)、炉壁4 (1.07%)、炉壁溶解物12 (3.21%) 羽口溶解物2 (0.53%)						
		粒状滓	S B 6 重量 33.8g			S B 7 重量 23.1g			
		鍛造剥片	S B 6 重量 1266.6g：～0.8mm 838.5g、0.8～1.5mm 282.8g、1.5mm～ 110.5g						
	S B 7 重量 1236.2g：～0.8mm 516.6g、0.8～1.5mm 400.3g、1.5mm～ 296.2g								
		鍛冶具	石鎚2 (2040.0g)、鉄床石・破片68 (14212.8g)						
		燃料の種類	分析資料 (NMH-8) 中の木炭：広葉樹 (アカガシ、ブナ) の可能性						
	遺構概要	9世紀、伯耆国庁編年第2段階/S B 6・S B 7の2時期に分かれる可能性/鍛冶炉3基/S S 3特殊遺構							
S B 6		平面規模	3間 (4.6m) × 2間 (3.2m)、面積14.7㎡の掘立柱建物						
		鍛冶炉 (旧)	掘り方：長0.73m×幅0.48m×深0.04m						
		鍛冶炉 (新)	掘り方：長0.41m×幅0.41m×深0.08m/旧炉を切る						
		S K 51	長1.15m×幅1.0m×深0.47m/鍛冶滓、再結合滓、粒状滓、鍛造剥片、炉壁溶解物 石鎚、鉄床石破片、木炭 備 考：貼床/工人の「足入れ穴」・「鉄床石の設置穴」の可能性						
		ピット	P 11：長0.34m×幅0.32m×深0.10m、P 12：長0.30m×幅0.24m×深0.12m/性格不明						
		操業の内容	精錬鍛冶から鍛錬鍛冶の一貫した操業体制が推定される						
		年 代	9世紀 (伯耆国庁編年第2段階) に比定される (出土土器による)						
S B 7		平面規模	2間 (4.5m) × 2間 (3.2m)、面積14.4㎡の掘立柱建物						
		鍛冶炉	掘り方：長0.96m×幅0.74m×深0.07m						
		S K 52	長0.76m×幅0.72m×0.22m/鍛冶滓、再結合滓、粒状滓・鍛造剥片 炉壁・羽口溶解物、鉄床石破片、木炭 備 考：貼床/工人の「足入れ穴」・「鉄床石の設置穴」の可能性						
		S K 70	長0.97m×幅0.96×深0.28m						
		ピット	P 9：長0.18m×幅0.18m×深0.18m、P 10：長0.35m×幅0.32m×深0.18m P 11：長0.25m×幅0.23m×深0.09m、P 12：長0.36m×幅0.32m×深0.25m/性格不明						
		操業の内容	精錬鍛冶から鍛錬鍛冶の一貫した操業体制が推定される						
		年 代	9世紀 (伯耆国庁編年第2段階) に比定される (出土土器による)						
S S 3		平面規模	長4.5m×短3.0m、面積 (9.95㎡) の段状遺構						
		S K	長3.08m×短1.0m×深0.2m						
		ピット	P 1：長0.74m×幅0.70m×深0.55m、P 2：長0.50m×幅0.50m×深0.75m P 3：長0.44m×幅0.38m×深0.71m、P 4：長0.32m×幅0.32m×深0.43m P 5：長0.36m×幅0.30m×深0.40m、P 6：長0.60m×幅0.28m×深0.10m/P 1～3主柱穴						
		特記事項	鉄滓ブロック上に径30×13cmの礫が伏せて置かれていた						
		年 代	9世紀 (伯耆国庁編年第2段階) に比定される (出土土器による)						
遺跡の性格		<ul style="list-style-type: none"> • S B 6・7 鍛冶炉は火窟状の炉構造である。操業内容は鍛造剥片・粒状滓などの分析結果により、精錬・鍛錬鍛冶作業を一貫して行っていた。 • S B 6・7 は同時操業の可能性は低く、少なくとも9世紀代の二時期に渡って行われていた。両遺構出土の微細遺物の総重量はほぼ近似していることから、操業期間・内容も同規模であったことが推察される。 • 製錬系含鉄鉄滓などが多く、S S 3のような含鉄鉄滓などを一括遺棄した遺構が存在することから、製錬遺跡が近傍もしくは調査区外に存在する可能性が指摘される。 • 遺跡から出土した鉄関連遺物の総量から、集落を賄う程度の操業内容であった。また、他の生産活動用具も総じて少なく、本遺跡は集落内の工房域の可能性が高い。 							

第6章 考古学的考察



第214図 鳥取県における古代製鉄・鍛冶関連遺構

表82 鳥取県における奈良～平安時代の製鉄・鍛冶関連遺構

番号	遺跡名	遺構形態	遺構規模		時期	出土遺物
			施設規模	製鉄炉・鍛冶炉規模		
1	上寺谷遺跡	製鉄炉 1	—	長軸2.8m、短軸0.95m、深さ0.45m	8世紀～9世紀	製錬滓
2	勝負谷遺跡	製鉄炉 1	—	長軸1.5m、短軸0.5m	9世紀	炉底滓、須恵器
3	中道東山西山遺跡	掘立柱建物跡 S B 6 - 鍛冶炉旧 - 鍛冶炉新	桁行 3 間 (4.6m)、梁行 2 間 (3.2m) 面積 14.7㎡	長軸 0.73m、短軸 0.48m、深さ 0.04m 長軸 0.41m、短軸 0.41m、深さ 0.08m	9 世紀	粒状滓・鍛造剥片 鍛冶滓、石錠、鉄床石破片
		掘立柱建物跡 S B 7 - 鍛冶炉 1	桁行 2 間 (4.5m)、梁行 2 間 (3.2m) 面積 14.4㎡	長軸 0.96m、短軸 0.74m、深さ 0.07m	9 世紀	粒状滓・鍛造剥片、鍛冶滓 鉄床石破片
4	新山山田遺跡	掘立柱建物跡 S B 01 - 鍛冶炉 1	桁行 2 間 (4.8m)、梁行 1 間 (3.6m) 面積 17.28㎡	長軸 1.0m、短軸 0.7m、深さ 0.35m	7 世紀後葉～9 世紀初	精錬鍛冶滓、U 字状鑄先
5	陰田広畑遺跡	鍛冶炉 1 (S X 03)	—	長軸 0.6m、短軸 0.5m、深さ 0.15m	6 世紀末～8 世紀後葉	粒状滓・鍛造剥片
6	下山南通遺跡	掘立柱建物跡 S B -07	桁行 1 間 (2.65m)、梁行 1 間 (2.29m) 面積 5.46㎡	—	9 世紀後半～10 世紀初頭	製錬滓、須恵器、土師器、木炭

おり、炉中心部には炭化物・焼土粒を多く混入する黒灰褐色粘質土が、炉壁寄りに同じ混入物を含んだ黒茶褐色粘質土が堆積している。上記の 2 遺跡は、中道東山西山遺跡の鍛冶炉の構造とは若干異なるようであるが、いずれも簡易な炉形態であり、掘立柱建物に伴うこのような鍛冶炉は 8～9 世紀代の伯耆において一般的な構造であったことが推察される⁽⁷⁾ (安間1995)。

9 世紀後半～10 世紀初めの製錬滓の集積遺構として伯耆町 (旧溝口町) 下山南通遺跡 S B 07・周

辺ピットがある。SB07は、桁行1間(2.65m)、梁行1間(2.29m)、面積5.46㎡の掘立柱建物であり、P6・7・8から鉄滓が出土している。P3に隣接するP6は径65cm、深さ12cm、P3・4の中間に位置するP7は長軸42cm、短軸37cm、深さ14cmであり、P6埋土中には土師器甕2点と鉄滓、炭化物が混在し、P7には須恵器甕が埋設され、内部に鉄滓、炭化物、土師器片が入れられている(中原1986)。中道東山西山遺跡SS3と状況は異なるが、いずれも製錬滓・含鉄鉄滓を集積する行為そのものは共通しており、再利用のための一時的保管や祭祀的な行為などの可能性も考えられる。

ところで、製鉄遺跡には官衙・寺院に帰属するものもあれば、一般集落に付随する工房もあり、それぞれの構造や関係は県内では依然不明である。たとえば、遺物から存在は予想されつつも、現時点で製鉄炉と鍛冶炉が同一の遺跡で共存する確実な事例はない。また、精錬鍛冶工房と予想される遺跡として新山山田遺跡が挙げられるが、県内においてそのような事例はまだ少なく、遺跡別、もしくは一遺跡の工房単位で精錬・鍛錬鍛冶工程の分業が9世紀代に確立していたかは、類例の蓄積を待ち検討したい。

おわりに

鉄は古代伯耆国の調物として知られているが、鳥取県内における古代鉄生産の様相を遺構から検討するには依然として情報が少ない。しかしながら、製鉄・鍛冶関連遺物を出土する遺跡は確実に増加しており⁽⁸⁾、自然科学的分析を取り入れた考古学的検討が徐々にではあるが可能となってきた。今後、これまで蓄積された成果と課題を踏まえた調査を実践し、遺構・遺物の相互の比較検討がなされることによって、古代伯耆国の鉄生産の実態が明らかになると期待される。(小口)

註

- (1) 倉吉市国府に所在する伯耆国庁跡の第5・6次調査報告によって、土師器の編年(第1～3段階)が巽淳一郎氏により提示され、第2段階は9世紀後半という年代が与えられている(巽1979)。なお、SB6・7鍛冶炉粉末部の放射性炭素年代測定を行ったところ、前者はBP1984±128、後者はBP1769±120の年代値が得られているが、いずれも第Ⅱ層下部の弥生時代形成層である第Ⅳ層のコンタミと考えられる。
- (2) 古代の鍛冶遺構について、安間拓巳氏は明確な火竈型の鍛冶炉を持つ遺構を鍛冶遺構と規定した上で、遺構形態によってA～D型の4種類に分類している。本遺跡の鍛冶遺構は、掘立柱建物内に鍛冶炉を有していることから、一応はC型に該当しよう(安間2000)。
- (3) たとえば、栃木県金山遺跡V区SI-010・025、福島県三貫地遺跡13号住居跡など。
- (4) 中世絵画資料や民俗事例などの検討から、日常雑器などを造る小規模な鍛冶には、全工程を管理・主導する親方たる「横座」と、「横座」の指示に従って向かう鋸を振る「先手」の最低2人が必要なのである。また、「横座」と「先手」は鉄床を挟んで対峙し、横座は炉に手の届く位置を占め、鞆を操作するとされる(朝岡1986、小林1988)。
- (5) 構成図に掲載された50点の総重量比との比較である(中森・濱2001)。
- (6) 砂鉄系の原料を用いたB号鍛冶炉で行われた再現内容と比較している(真鍋2002)。
- (7) 安間拓巳氏は古代の鍛冶炉について、炉床の構造からⅠ～Ⅲ型の分類を行っているが、その分類に基づけば、中道東山西山遺跡の鍛冶炉は、掘り込んだ面をそのまま炉壁とするⅠa型に該当する。ただし、出土遺物から炉壁も数点得られており、不明な上部構造も勘案し、掘り込み面に粘土を貼り付けて炉壁を構築するⅠb型の可能性も指摘しておきたい(安間1995)。
- (8) 6～8世紀の集落である琴浦町八橋第8・9遺跡、9世紀の集落である名和町名和乙ヶ谷遺跡、名和化粧谷遺跡、日南町霞遺跡群など。

【参考文献】

- 朝岡康二 1986 『東北院職人歌合』における鍛冶図 『民具マンスリー』19-8 神奈川県立日本常民文化研究所
 穴澤義功ほか 1992 「シンポジウム古代製鉄研究の現状」『千葉県立房総風土記の丘年報』15 千葉県立房総風土記の丘
 安間拓巳 1995 「古代の鍛冶炉—その形態および鍛冶工程との関連について—」『考古学研究』42-2 考古学研究会
 2000 「古代の鍛冶遺跡」『製鉄史論文集 たたら研究会創立40周年記念』たたら研究会
 角田徳幸 1999 「山陰における古代・中世の鉄生産」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』
 2004 「中国地方における古代末から中世の精錬鍛冶遺跡」『第11回フォーラム講演会「山陰における鉄・鉄器生産の諸問題」』(社)日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム
 小林公治 1988 「奈良・平安時代の鍛冶の復元的考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 哲学・史学編』別冊15集
 杉谷愛象ほか 1994 『萱原・奥陰田Ⅰ』(財)米子市教育文化事業団
 巽 淳一郎 1979 「Ⅲ-2 土器類」『伯耆国庁発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会
 津野 仁 1995 『金山遺跡Ⅳ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
 中原 齊 1986 『下山南通遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 中森 祥・濱 隆造 2001 『霞遺跡群』(財)鳥取県教育文化財団
 中森 祥 2003 「第7章特論2 名和町における鉄生産」『名和乙ヶ谷遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 濱田竜彦ほか 1998 『萱原・奥陰田Ⅱ』(財)米子市教育文化事業団
 松之舎文雄 2004 「鳥取の中世製鉄遺跡」『第32回山陰考古学研究集会 中国山地の中世製鉄遺跡』
 真鍋成史ほか 2002 『古墳時代の鉄製錬・鍛冶再現実験記録』交野市教育委員会
 湯川善一・八峠 興 2003 『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

第2節 平安時代の遺構と遺物について

1 はじめに

調査の結果、平安時代前期（9世紀代）の掘立柱建物跡6棟、段状遺構2基、土坑8基を検出した。周辺地域において、平安時代前期の遺跡は琴浦町東部を流れる加勢蛇川流域に集中するものの、それより西では三林遺跡、笠見第3遺跡において遺構・遺物が散見されるのみで、情報が乏しく当地域の様相は不鮮明といわざるを得ない。そこで、本稿では今後の調査・研究に少しでも寄与すべく調査成果を列記し、遺構群の変遷及び性格、今後の課題を要約してまとめに代えたい。

2 中道東山西山における平安時代の遺構・遺物

掘立柱建物（SB1・3～7）

〔位置〕 SB7を除くすべてが緩斜面に立地する。

〔主軸方位〕 西山に立地する3棟（SB1・3・4）は同一の主軸（N-1°-E）を取るが、東山ではN-23°-E（SB5）、N-18°-E（SB6）、N-12°-E（SB7）とばらつく。

〔規模・形態〕 桁梁行が3間×2間（SB3～6）、2間×2間（SB1・7）のものがあり、平面積はそれぞれ約14.2㎡（SB1）、18.1㎡（SB3）、19.3㎡（SB4）、23.3㎡（SB5）、14.7㎡（SB6）、14.9㎡（SB7）で、柱掘り方は不整形、楕円形を呈し平面規模が径1m未満のものが大半を占める。柱穴間距離は1.35m～2.65mで各遺構においてもばらつきがみられる。

〔付属施設〕 SB6・7内部では鍛冶関連遺構が検出されており、鍛冶作業が行われていたといえる。

段状遺構（SS2・3）

〔位置〕 いずれも西山谷部緩斜面に位置する。

〔性格・用途〕 SS3は鍛冶炉、鍛造剥片などの直接鍛冶作業に関連する痕跡は認められないものの、床面において多量の鉄滓とそれらを囲む礫を検出したことから鍛冶関連施設が想定される。

出土遺物

土師器、須恵器、鍛冶関連遺物が出土している。⁽¹⁾

〔土師器〕 遺構に伴う遺物は少量で、その多くが包含層出土のため一括性に乏しい。器種組成は坏・高台坏・甕であり、坏・高台坏は内外面とも赤色塗彩される。坏は底部が丸底と平底のものに大別され、それぞれに口縁部が直線的に立ち上がるもの、外傾するものがみられ伯耆国庁第2段階に比定される。墨書・刻書土器は出土していない。

〔須恵器〕 土師器同様、一括性に乏しい。器種組成は坏・高台坏・甕・壺である。

3 調査事例

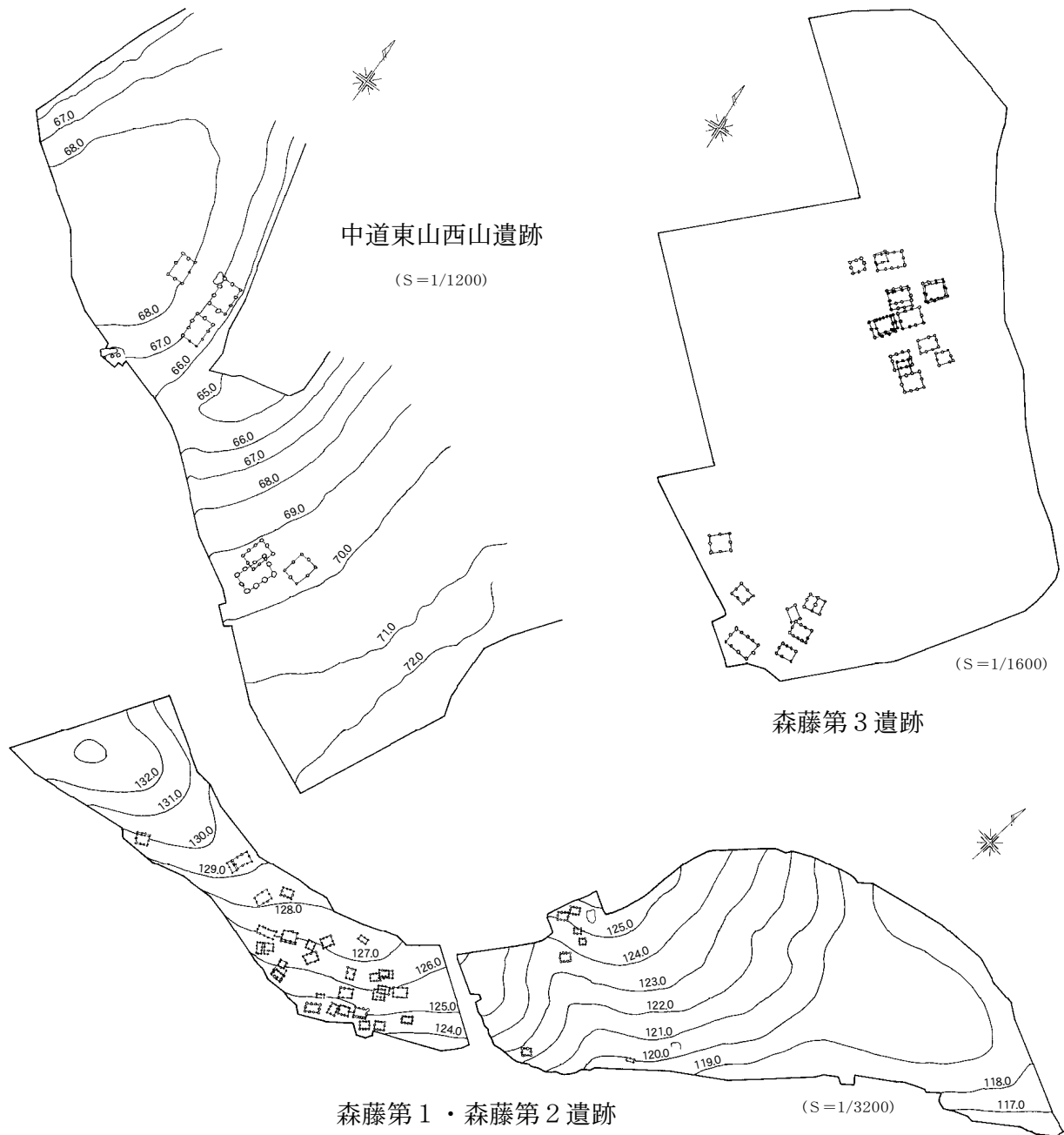
周辺地域において当該期の様相を把握できる遺跡は限られ、後述するように本遺跡と比べると性格が異なる。ただ、地域性を探る上でも比較検討が必要と思われるため、表にまとめこれらの共通点を列記しておく。⁽²⁾

○集落遺跡は丘陵上平坦面の遺構密度が低く、緩斜面に集中する。

○集落遺跡における掘立柱建物の形態は桁梁行が3間×2間のものが大半を占め、その多くは住居跡と考えられる。（大賀1987・1988、鬼頭1985）

表83 周辺における調査事例

遺跡名	所在地	立地状況	主な遺構・遺物	備考
水溜り・駕籠据場遺跡	東伯郡琴浦町槻下	丘陵緩斜面	掘立柱建物跡17棟（1×1間1棟、2×1間2棟、2×2間6棟、2×4間1棟、3×2間4棟、不明3棟）柵列1、土坑3基、溝状遺構2条 土師器、墨書土器、須恵器	集落
森藤第1・第2遺跡	東伯郡琴浦町森藤	丘陵緩斜面	竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡45棟（2×1間5棟、3×1間1棟、2×2間4棟、3×2間34棟、3×3間1棟）土坑9基 土師器・須恵器	集落
森藤第3遺跡	東伯郡琴浦町森藤	丘陵緩斜面	竪穴状遺構2棟、掘立柱建物跡22棟（1×1間1棟2×1間1棟、2×2間6棟、3×2間11棟、4×2間3棟）土坑4基 土師器・須恵器	集落
三林遺跡	東伯郡琴浦町三林	丘陵平坦面	土坑墓2基。蔵骨器、土師器坏	
笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町笠見	丘陵緩斜面	火葬墓1基。蔵骨器、土師器坏・甕	



第215図 遺構配置図および周辺遺跡図

4 平安時代遺構群の変遷及び性格

平安時代の遺構群は復元可能な土師器坏がいずれも伯耆国庁第2段階の範疇に収まるため、平安時代前期（9世紀代）が想定される。西山のSB1・3・4は同じ主軸方向を取ることから同一期のものと考えられるが、東山のSB5・6が重複関係にあり、このことからすべてが併存していたのではなく、遺構変遷は少なくとも2時期以上に分けられる。⁽³⁾ 主な遺構としては掘立柱建物が挙げられ、これらの立地状況は等高線に沿うように谷部縁辺の斜面・緩斜面に立地し、丘陵上平坦面の遺構密度は希薄といえる。この傾向は周辺遺跡においても概ね同様であり、当該期の丘陵上に立地する集落の特徴と考えられる。

周辺遺跡では桁行3間、梁行2間のものは住居跡の可能性が指摘されており、本遺跡の場合、桁行梁行および平面積が該当するSB3（18.1㎡）・SB4（19.3㎡）・SB5（23.3㎡）はその可能性が考えられる。しかし、SB3では鍛冶滓が出土していること、SB4はSB3と形態・規模、立地状況がほぼ一致し、同様の機能を有していたと想定されること、鍛冶関連遺構・遺物が谷部近辺に集中すること（第4章第5節）などの状況を重視すると、これらは住居としてではなく、何らかの鍛冶関連施設として用いられていたと考えられる。

したがって、遺構群を確認した調査区域は集落における鉄・鉄製品生産の場と考えられ、居住域は調査区外南側に存在すると推察される。なお、本県において鍛冶関連施設を伴う集落は類例が少ないため、本遺跡が特異な性格を有するのかが現時点では判断し難いが、今後の資料の増加を待ち改めて検討する必要がある課題といえるだろう。

5 今後の課題

今回の調査成果では平安時代前期の集落様相の一端が窺え、若干ではあるが立地状況で他遺跡との共通性や掘立柱建物における用途の差異も読み取れた。だが、部分的な様相は明らかになりつつあるものの、全体の様相は不明な点が多く、地域性・社会性の解明まで至っておらず今後の課題といえる。

このことは他の時代に比べ、調査事例が少なく、資料的限界により考古学的研究が遅れていることが大きな原因といえる。しかし、当然のことではあるが限られた情報の中でも歴史解明に努め、資料を蓄積していくことが必要である。したがって、今後は増加する資料の詳細な記録に加え、これまでの調査成果の再整理、再構築を行うことが重要と考えられる。 (福井)

註

- (1) 鍛冶関連遺物については第4章第5節を参照。出土土器は一括性に乏しく、復元可能な土器も少量のため、遺物個体数などの数量計測は行っていない。また、包含層出土土器が多いため他時期の須恵器も混在している可能性もあるが、他の遺構検出状況、遺物出土状況を考慮する限りでは、概ね当該期のものと考えられる。
- (2) 便宜上、周辺遺跡は琴浦町に所在する遺跡を指し、当該期の遺構・遺物のみ抽出し表を作成している。また、紙数の制約上、遺跡分布図を作成していないため第2章1節第2図を参照願いたい。
- (3) SB5～7において主軸方位にばらつきがみられるが、このばらつきが時期差または立地条件に起因するものなのかは今回の調査で検出した遺構数では明確に判断し難いため2時期以上とした。

【参考文献】

- 大賀靖浩 1987『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
 1988『水溜り・駕籠据場遺跡、森藤第3遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
 金子裕之ほか 1979『伯耆国庁発掘調査概報』倉吉市教育委員会
 鬼頭清明 1985『古代の村』岩波書店
 八峠 興 2000『山陰における平安時代の土器・陶磁器について』『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会
 山中敏史編 2003『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所

第3節 弥生時代後期の赤彩土器について

1. はじめに

近年鳥取県中部地域を中心に発掘調査が進み、弥生時代後期後葉を主体とする集落遺跡の調査が増え、赤彩土器の出土例が増している。当遺跡で出土した赤彩土器は、竪穴住居跡（S I 2・3・6・8・9）と土坑（S K 82）から計11点出土しており、器種は壺・甕・器台・ミニチュア土器で、すべて当該期の遺物である。今回、このような状況が鳥取県内の他の遺跡でも普遍的にみられるものであるのか、またそれがどのような意味を持つのかを検討していく。

2. 赤彩土器とは

赤彩（朱塗・丹塗）は、市毛 勲氏によると、甕・壺・鉢・高坏・器台などすべての器形に施され、九州から東北までの各地域・各時期にわたって認められ、焼成前に施す朱塗りにおいては縄文時代後期から認められる手法⁽¹⁾とされている。弥生時代の資料で見ると当遺跡周辺では、三保第1遺跡⁽²⁾で前期前葉の壺に赤彩が認められており、中期に入ると確実に赤彩土器の出土量が増え、中尾第1遺跡⁽³⁾や笠見第3遺跡⁽⁴⁾でみられる。特に笠見第3遺跡の土坑で、S K 128から出土している壺は、外面に装飾的な赤彩が施され特徴的である。後期に入ると、このような装飾的な赤彩はみられなくなり、赤彩パターンに規則性が認められるようになる⁽⁵⁾（第217図）。

九州北部における弥生時代中期の集落関連遺構と祭祀遺構の丹塗土器を分析した長友氏によれば、祭祀関連遺構からの出土が集落のそれよりも上回る地域があることなどから、地域ごとの出現頻度に濃淡はあるが、祭祀的な意味を含有しながら日常生活の場でも使用されていた⁽⁶⁾とし、赤彩に祭祀的意図を認めている。本論でも集落関連遺構⁽⁷⁾と墓関連遺構⁽⁸⁾で出土する赤彩土器⁽⁹⁾を対象とし、弥生時代後期における赤彩土器の県内の様相とともに日常・非日常との対比から祭祀的要素の有無も合わせて考察する。分析土器数は計421点である。

3. 赤彩土器の器種と赤彩パターン（第216・217図、表84参照）

ここでは後期の集落関連遺構と墓関連遺構から出土した赤彩土器を、因幡と伯耆に分けて述べる。

<集落関連遺構>

因幡—溝状遺構や遺構外からの出土が主である。赤彩範囲不明なものが含まれるが、赤彩器種の地域的傾向を見るために分析対象とした。

器種は壺・甕・鉢・高坏・器台で赤彩がみられ、赤彩パターンはA・Bタイプが併存する状況である。Cタイプは1点甕でみられた。Dタイプは鉢がある。この地域では、青谷上寺地遺跡が膨大な遺物量を誇っており、赤彩土器の遺構からの出土量は、全体の20%ほどで各器種多岐に渡るが、器台・高坏への赤彩が特に目立つと報告されている⁽¹⁰⁾。因幡では、この時期の集落遺跡の調査例が少なく資料の偏りは否めないが、壺・甕よりも高坏・器台に赤彩傾向が認められる。

伯耆—赤彩土器の出土量としては、因幡と比較するとかなり多い。集落関連遺構数が最も増加する後期後葉において、竪穴住居総数から赤彩土器が出土した棟数の割合を遺跡単位で見ると、天神川流域では20~40%、加勢蛇川流域では21~48%、阿弥陀川流域では27~40%、日野川流域では16~40%という結果であった。中でも加勢蛇川西側丘陵上で出土する割合がかなり高くなっており、井岡地中ソネ遺跡では70%（9/13棟）、三林遺跡では33%（3/9棟）、笠見第3遺跡では60%（24/38棟）、当遺跡では44%（4/9棟）、久蔵峰北遺跡では36%（9/25棟）となっている。器種では、ミニチュア

土器やその他蓋や注口土器なども含めあらゆる器種でみられる。特に壺・甕への赤彩傾向があり、A・B両タイプが認められる。Cタイプはわずかであるが甕で認められる。Dタイプは、鉢とミニチュア土器で認められ、壺・甕・高坏・器台は口縁部・受部片であった。このような状況の中で伯耆では、壺・甕より高坏・器台への赤彩が上回る遺跡がある。越敷山遺跡・青木遺跡からの出土土器がこれに相当する。日野川流域では東側とやや様相が異なるようである。

因幡と伯耆の両地域とも赤彩土器の出土は、集落関連遺構で広くみられた。因幡では高坏・器台に、伯耆では壺・甕を中心に赤彩される傾向にあり、中でも加勢蛇川西側丘陵では1遺跡内で出土する赤彩土器の割合が県内遺跡の中でも特に高かった。よって、この両地域の比較によって赤彩パターンや赤彩器種には、地域差が認められることが分かった。しかしながら赤彩土器は赤彩のない土器との間で、形式的にも出土傾向にも差が認められず、煤の付着がみられるものもある。これは赤彩土器も一般生活の中で使用され廃棄された日常の器であり、赤彩とは土器装飾の一手段であったと理解される。

＜墓関連遺構＞

因幡—供献土器は壺・甕・高坏・器台がある。出土した赤彩土器は高坏坏部・器台受部片で、赤彩パターンはDタイプである。赤彩の施される割合は、出土数の多い布勢鶴指奥遺跡⁽¹¹⁾の土壙墓からでは全体の約10%である。

伯耆—供献土器は壺・甕・高坏・器台がある。その中で赤彩土器はこれらの器種すべてで認められる。出土数の多い阿弥大寺墳墓群⁽¹²⁾で赤彩される割合は全体の約20%であった。赤彩パターンはすべてA・Bタイプがあり、破片（口縁部・坏部・受部）ではDタイプが多かった。

両地域の特徴は、赤彩されない土器も含めた器種構成や赤彩パターンから、集落内遺物と異なる点は認められない。このことから、当該期の供献土器としての儀礼的行為は、赤彩されるか否かではなく、底部穿孔や土器破碎等に優位性が認められると考えられる。

4. まとめ

鳥取県内の弥生時代後期の集落関連遺構と墓関連遺構では、器種別・赤彩パターンに差は認められず、赤彩自体に祭祀的意図が含まれるとは言い難い。ただし地域的傾向として、因幡は高坏・器台を、伯耆は壺・甕を赤彩する割合が高いことが指摘できた。しかも全体的に遺跡数が増加する後期後葉では、現在のところ伯耆地域内での赤彩土器の出土量は加勢蛇川周辺が最も多かった。赤彩パターンでは、広く平均的にA・B両タイプの赤彩が同様の割合で施されていることが分かった。前述したように赤彩とは、基本的に土器装飾の一手段と捉えられ、後期における県内の地域的差異は、土器の生産・装飾においてその手法を用いる集団の性格を示していると考えられる。このことから当遺跡は、この手法を踏襲し保持する集団が最も色濃く分布する地域に属する遺跡であったと考えられる。（岩井）

註

(1)市毛 勲 1975 「弥生時代の朱」『朱の考古学』 雄山閣

(2)浅田康行ほか 2005 『三保第1遺跡』(財)鳥取県教育文化財団 *担当者によれば非常に遺存状態が悪く、赤彩が部分的にしか残存していない状況であるとしている。

(3)玉木秀幸ほか 2004 『中尾第1遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

(4)牧本哲雄ほか 2004 『笠見第3遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

(5)Dパターンに確実に分類されるものは、後期においては鉢とミニチュア土器がある。その他の器種のDタイプは壺・甕(口縁部)、高坏(坏部)、器台(受部)で、破片であるため全容が不明確なものがほとんどである。しかしこれらは、当該期完形品でも内外面赤彩されたものが見受けられないため、壺・甕・高坏・器台に関しては本来Bタイプであった可能性が高いと考えられる。

(6)長友朋子 2003 「土器装飾からみた九州北部の地域間関係」『立命館大学考古学論集Ⅲ-1』立命館大学考古学論集刊行会

- (7) 集落関連遺構として資料の不足を補うために、竪穴住居跡だけではなく、土坑、土器溜り、溝状遺構、段状遺構も含めた。対象遺物は報告書で図化されたものに限る。ただし、各遺跡すべての竪穴住居跡からの出土は認められず、赤彩土器のみで構成される遺構もない。また、出土状況においてすべてが建物機能時のものとは言えず、廃絶後の投棄によるものも含まれる。今回は対象を土器の様相に限定し検討したことを付記しておく。遺構名の記載は竪穴住居跡をS I、土坑をS K、溝状遺構をS D、段状遺構をS Sに統一して記載した。また、時期区分に関しては、弥生時代後期前半を清水編年V-1~2様式、松井編年V~VII期、妻木晩田編年4~8期、青木編年II~III古期、後期後半を清水編年V-3様式、松井編年VIII・IX期、妻木晩田編年9期、青木編年III新期を参考に分類した。
- (8) 墓域に関して、基本的に四隅突出墓では墳丘中、墳上、周辺、土壙墓では埋土上周辺での出土土器を供献土器として分析対象とした。ただ、赤彩土器が出土する遺跡と出土しない遺跡があり、赤彩土器が出土した遺跡のみの分析によることを付記しておく。
- (9) 赤彩土器は他に丹塗土器・朱塗土器とも記載される。ほとんどの資料が成分分析されておらず、一概にベンガラとは言いがたい。今回は赤彩する行為を糸口とするため、赤く塗彩されている土器はすべて分析対象とした。
- (10) 北浦弘人 2001 『第4章 出土遺物』『青谷上寺地遺跡3』(財)鳥取県教育文化財団
- (11) 中村 徹 1992 『東柱見遺跡・布勢鶴指奥墳墓群』(財)鳥取県教育文化財団
- (12) 名越 勉 1980 『上米積遺跡群発掘調査報告II-阿弥大寺地区一』倉吉市教育委員会
- (13) 今回分析した丘陵上の遺跡(当遺跡も含む)で、赤彩土器のほかに赤色顔料の付着した石器(台石・磨石・中央が磨り減った凹石・塗彩石)が数点出土している。付着した顔料が土器の塗彩用に用いられたかどうかは不明であるが、今後合わせて検討したい課題である。
- *各遺跡の報告書一覧は、紙面の都合上割愛させていただいた。



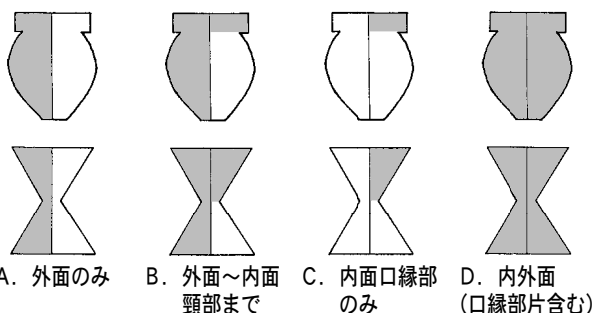
第216図 赤彩土器出土遺跡

(遺跡名)

1. 岩吉遺跡Ⅲ 2. 秋里遺跡(西皆竹) 3. 青谷上寺地遺跡 4. 宇谷第1遺跡 5. 宮内遺跡群(宮内第1・宮内長谷遺跡) 6. 南谷大山遺跡 7. 南谷ヒジリ遺跡 8. 大畑遺跡 9. 両長谷遺跡 10. 大沢前遺跡 11. 服部遺跡 12. 後ろ谷遺跡 13. 水溜り・駕籠据場遺跡 14. 森藤第1・2遺跡 15. 井岡地中ソネ遺跡 16. 三林遺跡 17. 笠見第3遺跡 18. 中道東山西山遺跡 19. 久蔵峰北遺跡 20. 茶畑遺跡群(古御堂笹尾山・古御堂新林・押平尾無遺跡) 21. 妻木晩田遺跡 22. 越敷山遺跡群 23. 宇代寺中遺跡 24. 天王原遺跡 25. 青木遺跡 26. 古市宮ノ谷山遺跡 27. 服部墳墓群 28. 布勢鶴指奥墳墓群 29. 下坂1号墓 30. 柴栗遺跡 31. 上米積遺跡-阿弥大寺地区一 32. 泰久寺遺跡-中峯地区一 33. 湯坂遺跡

(分析遺構)

1. S D 26・10、土器群4 2. S K 1・8・18・26・31、遺構外 3. S D 11・26・33・38、土器溜り11、遺構外 4. S I 7・S D 2 5. S K 11・12・13、S S 01(宮内第1) S I 1、S S 1・2(宮内長谷) 6. B区 S I 1・2 7. S K 1・2・3 8. S I 4・13・14 9. S I 1・5・10 10. S I 1・2・4 11. S I 4・7・11 12. S I 1・2、S K 3 13. S I 4・5・6・8 14. S I 3・4・9 15. S I 2・4・5・6・9・10・11・12・15、S K 7、遺構外 16. S I 4・25・35、S K 6・7・8、遺構外 17. S I 40・42・49・112・120・132・153・160・163 / S I 7・10・23・37・51・66・71・74・75・76・79・97・101・114・115・119・133・139・144・149・151・159・166・170、S K 58・61 18. S I 2・3・6・8・9、S K 82 19. S I 12・18・21・36・37・39・42・45・57 20. S I 2・3(古御堂笹尾山) 遺構外(古御堂新林・押平尾無) 21. 東側環濠・西側環濠、S I 2・5・環濠(洞ノ原西側丘陵)、S I 3・25・45・59・64・96・117・122・147・150・156(妻木山地区)、S I 25・33・39・46・48・52・53・84・87、S K 1(松尾頭地区)、S I 6・20・27・52・57・61・63・65、S K 1・146(妻木新山地区) 22. S I 3(I-3a区) S I 4・9(IV-18a区) S I 4・10・12・23(IV-18b区) S I 7(IV-19a区) S I 2・9(IV-19b区) S I 2・3(IV-20a区)、S I 2・4(荻名第3) 23. S I 2・3 24. S I 3、S S 1 25. S I 7・8・23 26. S I 7



第217図 赤彩パターン

表84 器種別赤彩表

〈集落関連遺構〉

地域区分	遺跡番号	時期	遺構	器種別(赤彩パターン参照)	小計	煤の有無	特徴的な遺物および備考	
因幡	1	前半	SD	直口壺2、甕1、高坏1、器台2、脚部2	8		赤彩範囲不明	
			SK	台付壺1、甕3(内C1)、器台1	5	甕2、器台1	台付壺あり、赤彩範囲不明のものあり	
	2	後半	遺構外	壺A1、器台2	3		小型脚付短頸壺、赤彩範囲不明のものあり	
			SD	甕B3、高坏A1	4		小型甕あり	
	3	前半	遺構外	壺B1、甕B1、鉢A1、器台A2・B2	7		小型壺・甕(頭部円形穿孔)、脚付鉢	
			SD	壺A2・B2、鉢D1、高坏A1・B1、器台A5・B1	13		小型壺、台付壺(頭部円形穿孔・把手付のもの含む)、非在地系土器あり	
		後半	遺構外	壺B1、甕B1	2		無頸壺、台付甕	
			SI	甕D1、鉢D1、高坏D1	3		小型丸底鉢1	
	伯耆	4	後半	SD	甕A1	1	甕1	
				SK	壺A1、甕D1、器台1、蓋1	4		器台受部片・蓋(赤彩範囲不明)
5		後半	SD	壺1	1		小型特殊壺	
			SI	甕A1、器台B1・D1	3			
6		後半	SD	壺B1、甕B2・C1、器台B1・D1	6		直口壺1、把手付き甕1	
			SI	高坏B1、器台D1	2		鉢型高坏1	
7		後半	SK	甕A2・C3	5			
8		後半	SI	高坏B1・D1、器台A1	3			
9		後半	SI	壺B3、甕A1・D1、高坏A1・B1、脚底部B1	3		小型壺1	
10		後半	SI	壺C1、甕D1、器台B1・D2	5		直口壺片1	
11		後半	SI	壺A1、甕B3・D1、高坏A1、ミニチュア土器D2	8	甕2、高坏1	「く」の字状口縁壺1、台付甕1、甕頭部円形穿孔1、ミニチュア土器片2	
12		後半	SI	壺B1、甕A2・D1、器台A1	6		小型甕1	
			SK	鉢D1	1			
13		後半	SI	甕B2・D1、鉢A1、高坏A1・B1、脚底部A1	7	甕1、高坏1	台付鉢?	
14		後半	SI	甕D2、器台D1、脚底部1	4		甕頭部円形穿孔1、赤彩範囲不明のものあり	
15		後半	SI	甕A5・B9、鉢D1、高坏B1、注口土器注口部A1	17	甕4	台付甕1、甕頭部円形穿孔あるもの含む	
			SK	器台A1	1			
			遺構外	壺A1、高坏A1	2			
16		後半	SI	甕B1・D1、器台D1	3		甕頭部円形穿孔1	
			SK	壺D1、甕B2	3			
			遺構外	甕A1、鉢D1	2			
17		前半	SI	壺A1、甕B3・C1・D1、器台A3、D2	11			
			SI	壺A5・B1・D8、甕A9・B8・D4、高坏A1・B3・D1、器台A4・B2・D4、把手A2	52	壺2、甕5	直口壺2、小型裝飾壺2、台付甕1、甕頭部円形穿孔2	
		後半	SK	高坏A1、注口土器注口部A1	2			
18		後半	SI	壺B1・D1、甕C3・D1、器台A2・D1、ミニチュア土器A1	10		台付壺1	
			SK	甕B1	1			
19	後半	SI	壺2、甕9、高坏1、器台3、把手1	16	壺1、甕1、器台1	台付甕1、赤彩範囲不明		
20	後半	SI	甕A1・B2、器台A1・D1	5				
	遺構外	壺A1、甕B3、高坏B2、器台A1・B1、把手A1	1		小型台付裝飾壺1			
	遺構外	甕A1、器台A1、脚底部A1	3		脚裾部にスタンプ文あり			
21	前半	SI	甕A5・D1、高坏A3・C1、脚底部A2	12		「く」の字甕、頭部円形穿孔3		
		SK	甕A4、高坏D1	5		甕頭部円形穿孔2		
	後半	環濠	甕A2・C1・D4、鉢B1、高坏A4、脚底部A1・C1・D1	15				
		SI	壺A2・D3、甕A8・C1・D6、高坏A1・C1、器台A2、脚底部A1	25		無頸壺1、直口壺、台付壺1、小型甕1、甕頭部円形穿孔2、「く」の字甕1		
22	後半	SD	甕A5・C2・D2、高坏A4・B1、器台A2、脚底部A9	25		甕頭部円形穿孔2		
		環濠	壺A1、甕A4・D1、器台D3、脚底部A3	12		壺頭部円形穿孔		
22	後半	SI	壺A1・B1・C1・D1、甕8(内A5)・C1、鉢1、高坏8(内A2・D4)、器台5(内A1・D1)、甕型土器A1、脚底部2(内A1)	20		小型壺、小型直口壺あり、赤彩範囲不明のものあり		
23	後半	SI	壺D1、甕D1、高坏B1、脚底部A1	4				
24	後半	SI	脚底部C1	1				
		SS	器台A1	1				
25	後半	SI	壺2、甕2、高坏7・A1、器台8、脚底部3・B1、蓋A1	22		「く」の字甕あり、赤彩範囲不明のものあり		
26	後半	SI	壺B1、鉢D1	2				

〈墓関連遺構〉

地域区分	遺跡番号	時期	遺構名	器種別(赤彩パターン参照)	煤の有無	その他出土遺物(赤彩なし)
因幡	27	後期後半	服部1号墓 第1主体部	高坏坏部片D1		
	28	後期中～後半	布勢1号墳丘墓・土壘墓05	高坏2、器台1(赤彩範囲不明)		把手付壺1・台付壺1・壺1、甕6、高坏10、器台11
		後期後半	土壘墓03・35	器台2(赤彩範囲不明)		器台4、甕2、甕か壺底部2
	29	後期中～後半	下坂1号墓 第7主体部	器台受部片D1		甕1、甕か壺の底部1、高坏、器台
伯耆	5	後期後半	土壘墓15	器台受部片A1		甕3、小型壺1
	30	後期後半	1号・2号土壘墓	直口壺B1(口縁部に円形穿孔)、高坏B1、脚部片A1		
	31	後期中頃	1号墳丘墓(墳丘中～突出部)・第3土壘墓	直口壺B2、小型甕B1(底部穿孔)、甕片B1、高坏A2、器台A2・B3・D1	壺2、甕1	壺6、甕片12、器台1
		後期後半	2号墳丘墓(突出部周辺)	甕片D6(外面煤付着4)、脚部B1	甕4	壺甕片3・内1点は小型甕、壺甕の底部1
	32	後期後半	土壘墓9	高坏坏部片D1		
	33	後期後半	湯坂1号墳丘墓(区画内SD1)	壺A1、「く」の字状口縁壺B4、高坏脚部片A1		複台口縁を持った甕2、壺甕の底部1
	21	後期前半	土壘墓5～7	小型壺A1、小型甕A1、甕片D1、高坏A2、器台A2		甕片多数、高坏、器台、鉢

第4節 中道東山西山遺跡における弥生時代集落の構造

1 はじめに

中道東山西山遺跡では弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての竪穴住居（建物）跡⁽¹⁾が10棟検出された。このうち、東山の同一尾根に分布する9棟の竪穴住居（建物）跡はすべて弥生時代後期後葉から終末期前半に属するもので、短期間に営まれた集落の様相を端的に表す資料と考える。そこで小稿では、本遺跡で検出された弥生時代後期後葉～終末期前半の竪穴住居跡について諸属性および遺構配置を検討し、その集落構造を探っていく。

2 集落の構造と変遷

(1) 各竪穴住居（建物）跡の諸属性・配置の整理と検討（第218図）

規模・構造 中道東山西山遺跡で検出された竪穴住居（建物）跡は平面形態および主柱数から以下の4つに大別される（表72参照）。

A類：隅丸方形プラン—4本柱（S I 2・7・9・10）、床面積8.9～22.3m²

B類：隅丸五角形もしくは隅丸方形プラン—5本柱（S I 4・5・6 a・8）、床面積21～34m²

C類：円形プラン—7本柱（S I 6 b）、床面積31m² ※主柱は周壁沿いに配す

D類：隅丸長方形プラン—主柱2本以下（S I 1・3）、床面積7～8 m²

このうちD類としたものは規模・構造から住居以外の用途も想定される竪穴建物⁽²⁾である。

廃絶時期 出土遺物から推定される廃絶時期はS I 4～7・9・10が弥生時代後期後葉、S I 2・3・8が（後期後葉～）終末期前半、S I 1が終末期後半～古墳時代初頭である。S I 2・3・8出土土器のうち形態的に後出的な特徴をもつものはわずか（2・3・68など）で、その差異も顕著でない。既存編年と照査すれば後期と終末期という二時期に分かれるが、過渡期的な様相を示しているとも考えられる。

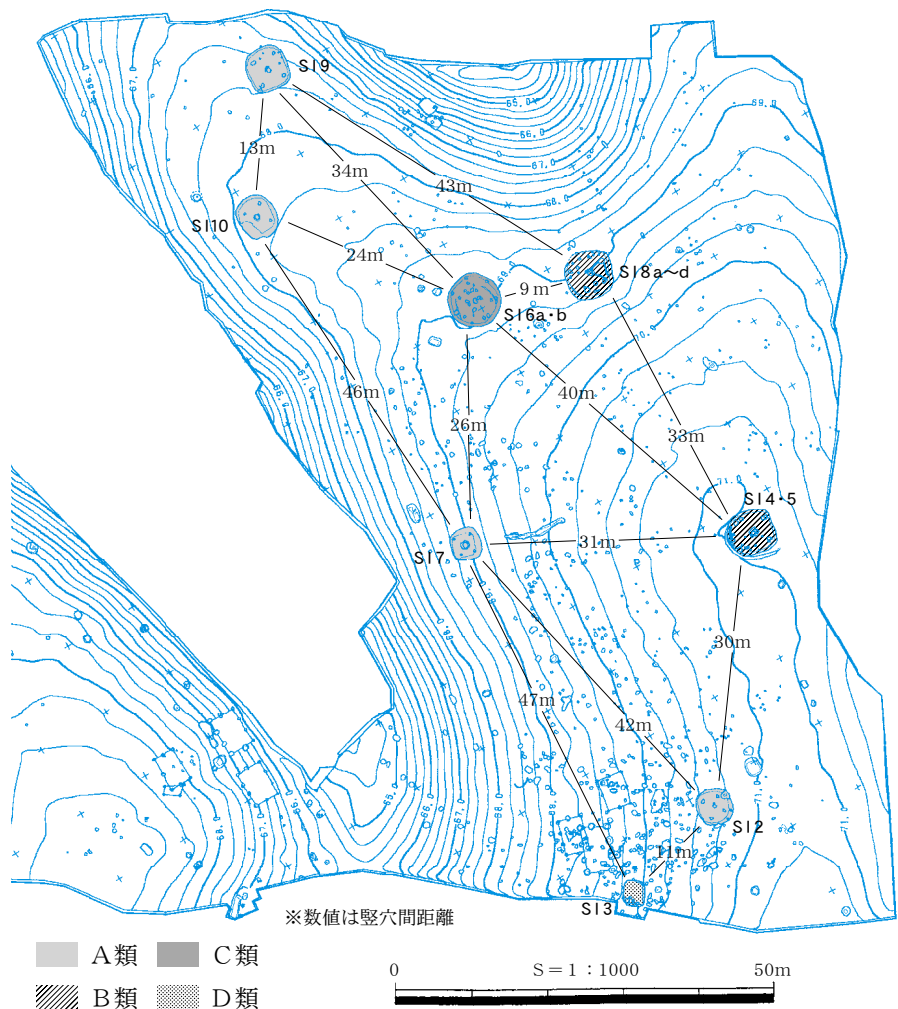
立地・位置関係 S I 4～6・8などB・C類が尾根平坦面に構築されるのに対し、A類のS I 2・3・7・9・10は傾斜変換点近くの緩斜面に構築されるという傾向が認められる。西山のS I 1を除く9棟の竪穴間距離をみると、B類のS I 4・5あるいはS I 8を中心にA類のS I 2・7・9・10が30m台の間隔をもって配されているが、廃絶時期がほぼ同じと考えられるもの同士でS I 2—S I 3間が約11m、S I 9—S I 10間約13mと近接位置にある。またS I 6とS I 8はともに建替えを行っており、S I 8廃絶前の一定期間両者が並存した可能性は否定できず⁽³⁾、仮に両者が並存した状態での最接近距離は約9mとなる。妻木晩田遺跡の最盛期における集落構造の復元研究を行った高田健一は、近接・密集する竪穴住居群の中から同時並存の可能性が考えうるものを抽出する場合、竪穴外に構築される周堤等の建物構造を想定することが必要であると指摘している（高田2003）。妻木晩田遺跡での調査研究成果を踏まえて竪穴の外周に概ね3m前後の周堤幅を見積もって検証する（以下、竪穴間距離から周堤幅を除外した距離を「建物間距離」と呼ぶ）と⁽⁴⁾、かなり近接するS I 6—S I 8間あるいはS I 2—S I 3間でも建物間距離が約3～5m確保できるため、机上の論理では同時並存を想定しうる。よって、物理的に同時並存可能な各時期の最大竪穴住居（建物）数は弥生時代後期後葉がS I 4 or 5・6・7・8（b～d）・9・10の7棟、弥生時代終末期前半がS I 2・3・8 a（b～d）の3棟（S I 8は時期幅を広くみる）となる。

埋没過程・出土遺物 竪穴住居（建物）廃棄後の埋没状況は、S I 2・3・5・6（b）・10が人為的な埋め戻し、S I 1・4・7・8 a・9は自然堆積とみられる。後期後葉の竪穴住居間でも埋没過程に違いがあり、土器小様式内で廃絶の時期が異なることを暗示している。各住居出土遺物から明確な偏差は読み取り難いが、S I 8 a、S I 9の廃絶に伴い数少ない鉄器が残されており、S I 8 aで出土した有帯袋状鉄斧は九州地域からの搬入品とみられる。

(2) 集落の基本構造と変遷（案）

中道東山西山遺跡における弥生集落は後期後葉段階には形成されている。S I 4・5、S I 6、S I 8は同位置での建替えを複数回行っているため、建て替え間隔を実際どの程度とみるかにもよるが、これら3棟から推測される当該期の集落変遷は少なくとも2段階程度見積もる必要がある。A類住居は基本的に建て替えが行われていないが、S I 4～6・8の存在を考慮すれば、これらも2段階程度の変遷を経た累積結果である可能性がある。例えば、他に比べ近接関係にあるS I 9とS I 10が当該住居の領域内で建て替え移動（藤田1984）が行われた結果であるならば、同時並存関係ではなく先後関係にあるとみることもできる⁽⁵⁾。以上から集落の初現期に構築された竪穴住居跡の候補は尾根上平坦面にB類のS I 5・6 a、傾斜変換点に近い緩斜面にA類のS I 7・9・10（もしくは9・10のどちらか）となり、組み合わせ方法は多様だが、B類とA類の住居が建物間距離約20～30mを置いてセットになる4～5棟のグループが径約100mの範囲に展開する姿が基本的な集落構造であると推測される。

その後、最大規模を誇ったS I 5は平面プラン等を維持したまま規模を縮小し（→S I 4）、逆にS I 6 aは規模を拡大しC類住居へ変貌する（→S I 6 b）。S I 6 b廃絶前にはS I 8 b～dが構築された可能性もあろう。B～C類住居群における建物構造の変化が軌を一にしたものかどうか不明であるが、建て替えや切り合いもなく単発的に営まれた感のあるA類住居群とは対照的な動静である。S I 6 bの出現をもってグループ内の竪穴住居構成がC類+B類+A類のセットへ（S I 4・5とS I 6 bが並存していなければC類+A類のセット）変化して



第218図 後期後葉～終末期前半の集落構造

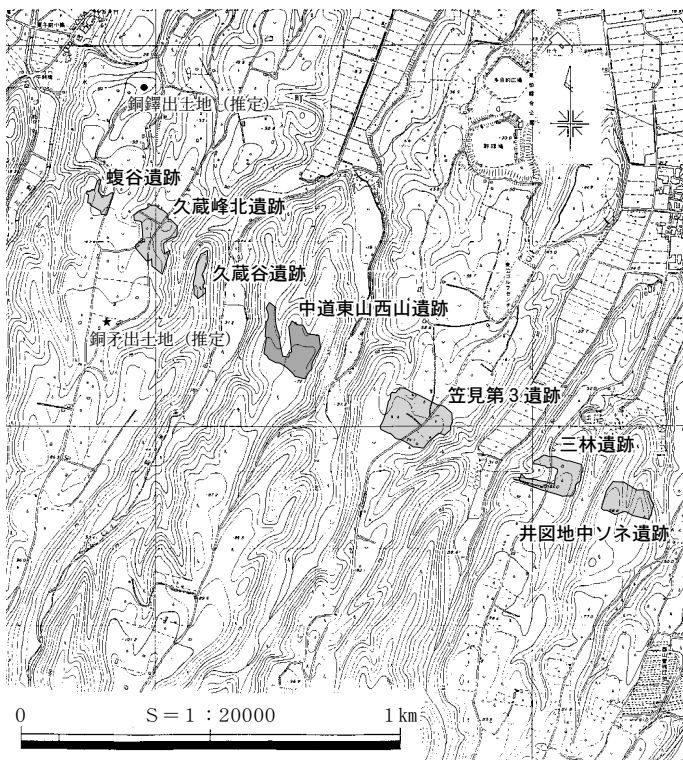
いるが、グループを形成する竪穴住居数はA類住居群における領域内での建て替え等も考慮すればやはり4～5棟であると推測される。このグループが本遺跡における「居住単位」(高田2003)と捉えることができ、同位置で建て替えを繰り返すB・C類はその核となる竪穴住居だったと推察する。

終末期前半ではS I 2・3・8 a (b～d) が広範に散在する。S I 2・3は南側の調査範囲外に帰属する居住単位の存在を想定できても、S I 8は半径60m以内に同時期の遺構が皆無で孤立状態にあり、極端な建物配置となる。S I 2・8は時期比定に難があるため再検討を要するが、調査範囲から推察する限り、終末期前半には前段階までのグループは解消され、居住地は別地点へ移動したと想定したい。

弥生時代後期後葉における本集落の居住単位には、尾根平坦面上に構築される多角形～円形プランの竪穴住居を中心として、その周縁の緩斜面に隅丸方形プランの竪穴住居を配するという立地面での規範が存在する。谷に面して急崖となる尾根東側には竪穴住居跡だけでなく同時期の遺構は認められず、集落をとりまく古環境の様相(伐開の範囲も含む)が不明ながら、居住地としての利用には制約があったものとする。調査範囲はあくまで工事範囲である以上、外周に広がる尾根平坦面～緩斜面に集落(居住地)が展開する可能性を考慮せねばならないが、当該期遺構群の展開する範囲で他時期遺構との切り合いや後世の攪乱による消失がほとんどないため不確定要素は少なく、往時の集落像を端的に表している。周辺も含めた当該時期の集落の基本的構造を探る上で重要な知見を得たと評価できよう。

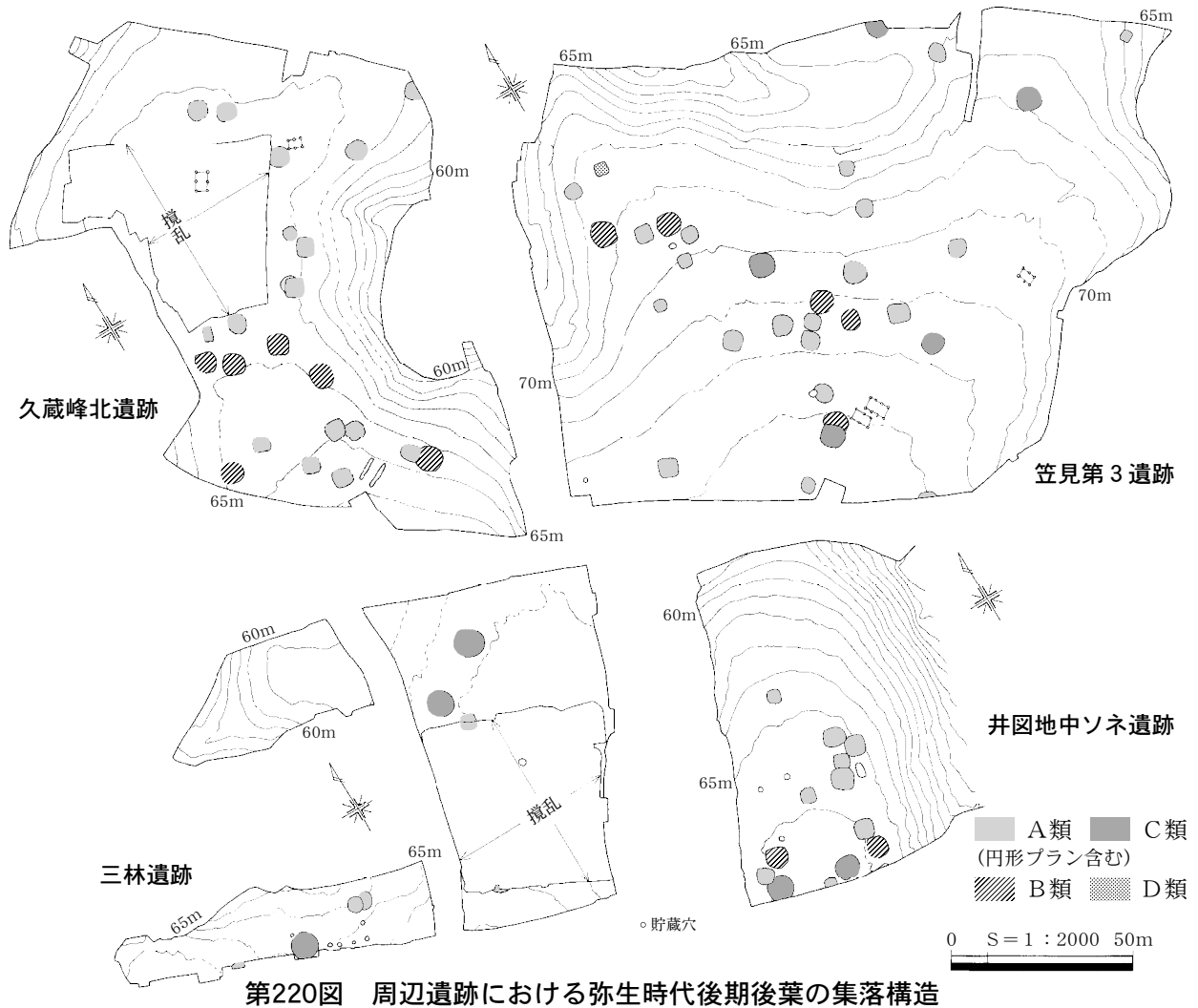
3 周辺遺跡群の動態と中道東山西山遺跡—予察と今後の課題—

中道東山西山遺跡に限らず周辺丘陵上では弥生時代の集落跡が調査されている(第219図)。本遺跡の弥生集落を周辺丘陵の同時期集落と比較すると、集落を形成する居住単位はC類(支柱数は6～9本)住居もしくはB類住居とA類住居で構成される点ではほぼ同じであるが、一時期の建物数や密集度といった面では弥生～古墳時代に長期存続するような笠見第3遺跡(牧本編2004)、久蔵峰北遺跡



第219図 中道東山西山遺跡周辺の弥生～古墳時代集落跡

(小山・野口・長尾編2004)とは格差が見られ、B・C類住居とA類住居の立地上の差異や構成棟数では井岡地中ソネ遺跡(君嶋・大野編2003)に近似する(第220図)。ガラス玉や鉄器の保有量に優位性がみられる笠見第3遺跡、後期前葉～後葉にかけて水晶も使用した玉生産が行われる久蔵峰北遺跡、後期をとおりて単位集団の中核となるC類住居の平均床面規模が約40～60㎡と周辺集落に比して突出する三林遺跡(家塚・君嶋編2004)など、各集落は出土遺物や建物規模といった面でも等質的でなく、多様なあり方を示す。上記の集落遺跡は本遺跡も含め中小河川によって尾根状に開析された一連の丘陵上に展開しており、すべてではないにしろ有機的な繋がりをもって形成されていると考える。



第220図 周辺遺跡における弥生時代後期後葉の集落構造

中道東山西山遺跡では確実に同時期といえる掘立柱建物や上屋を伴うテラス、そして貯蔵穴といった住居以外の集落構成要素を確認・検討できなかったが、周辺遺跡では当該期住居に伴って検出されており、本来的にはそれらも含めた総合的な検討が必要であると痛感する。対象時期・地域を広げ、周辺集落の構造および消長を整理し改めて検討することとし、今後の課題としたい。(高尾)

註

- (1) 本報告書凡例参照。
- (2) ただ、上屋の有無も不明確なS I 3などは竪穴建物とするより「竪穴」と表現するほうが適切かもしれない(浅川1998)。浅川滋男 1998「シンポジウムの主旨と概要」浅川滋男編『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 先史日本の住居とその周辺』同成社
- (3) S I 6とS I 8両者が全く並存しなかった場合、この地点だけで弥生時代後期後葉～終末期前半に最大5段階の変遷を辿ることとなり、建て替え間隔を短くみても周囲に展開する各時期の遺構数・遺構密度から考えればその可能性は低い。よって、この2棟は一時期同時並存した、近接して構築することが有意な、親縁性の高い竪穴住居跡であると推察する。
- (4) 本節ではすべての竪穴住居跡において周堤が存在すると仮定して検討を行った。ただ、周壁沿いに多数の支柱(5本以上)をもつような多角形～円形の大型竪穴住居跡や、支柱数2本以下で床面積10㎡未満の小型竪穴住居跡の竪穴外部施設も含めた占有面積については、その上屋構造の復元的研究も含めた検証が必要不可欠であることはいうまでもない。
- (5) 妻木晩田遺跡における既存調査資料の分析・検討結果によれば、V-3期以降床面積を広くとる竪穴住居は隅丸方形プラン—4本柱の構造に集約されていき、なおかつ柱穴間距離もVI期にかけて3~4mに拡大する傾向にあることが指摘されている(馬路・濱田2003)。本遺跡のS I 9も柱穴間距離平均3.1m、床面積22.3㎡を測るなど住居構造においては同プランの他住居跡と明確な違いが生じており、より後出的な要素をもつともみれる。

【参考文献】

家塚英詞・君嶋俊行編 2004 『三林遺跡・井図地頭遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 君嶋俊行・大野哲二編 2003 『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 小山浩和・野口良也・長尾かおり編 2004 『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡』(財)鳥取県教育文化財団
 高田健一 2003 「妻木晩田遺跡における弥生時代集落の復元」馬路晃祥編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会
 藤田憲司 1984 「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」『考古学研究』第31巻第2号 考古学研究会
 馬路晃祥・濱田竜彦 2003 「妻木晩田遺跡における竪穴住居跡調査方針(案)」馬路晃祥編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会
 牧本哲雄編 2004 『笠見第3遺跡』(財)鳥取県教育文化財団